

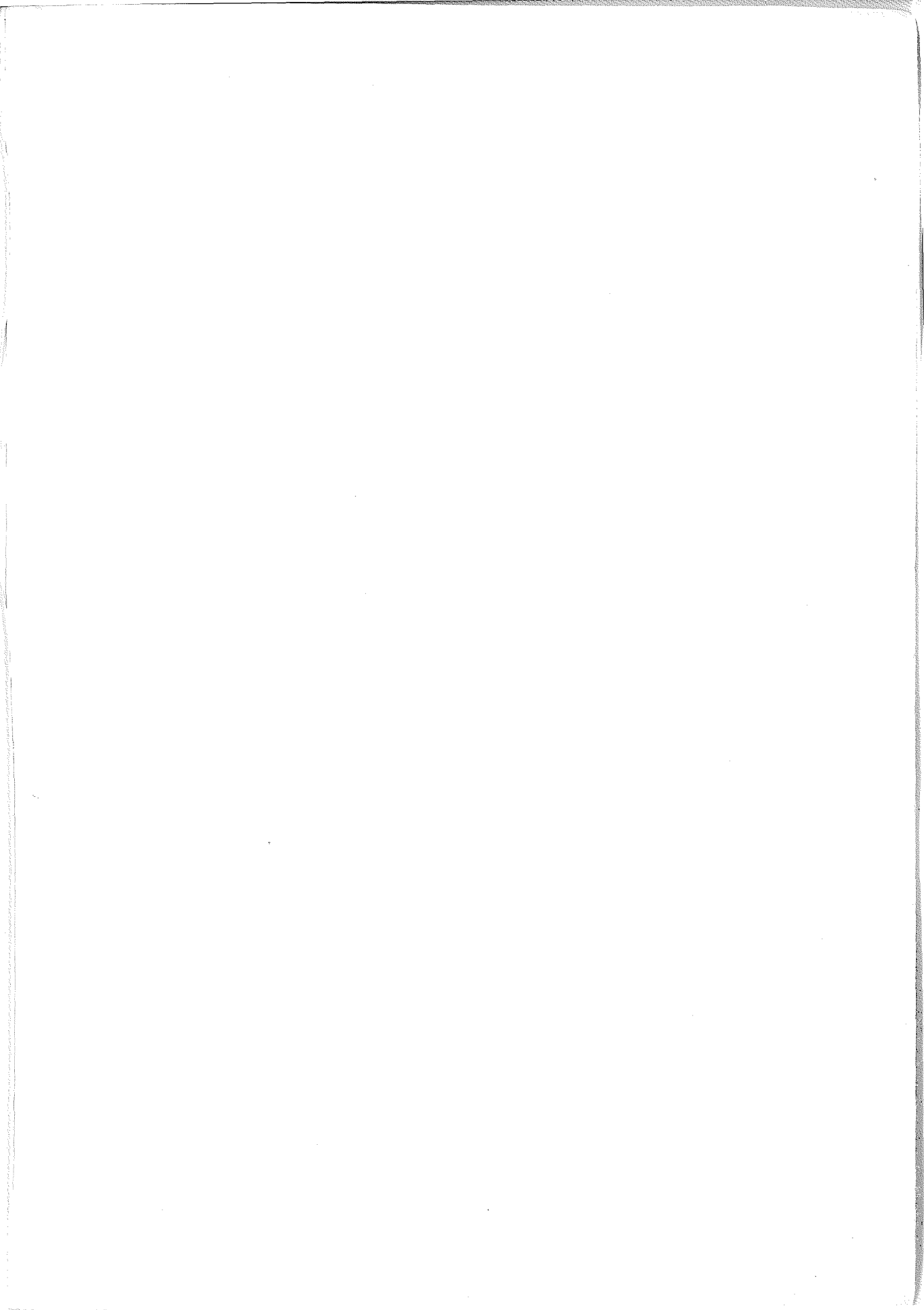
岩手県文化財調査報告 第94集

# 平泉遺跡群範囲確認調査

—第37次柳之御所跡発掘調査報告書—

平成5年3月

岩手県教育委員会



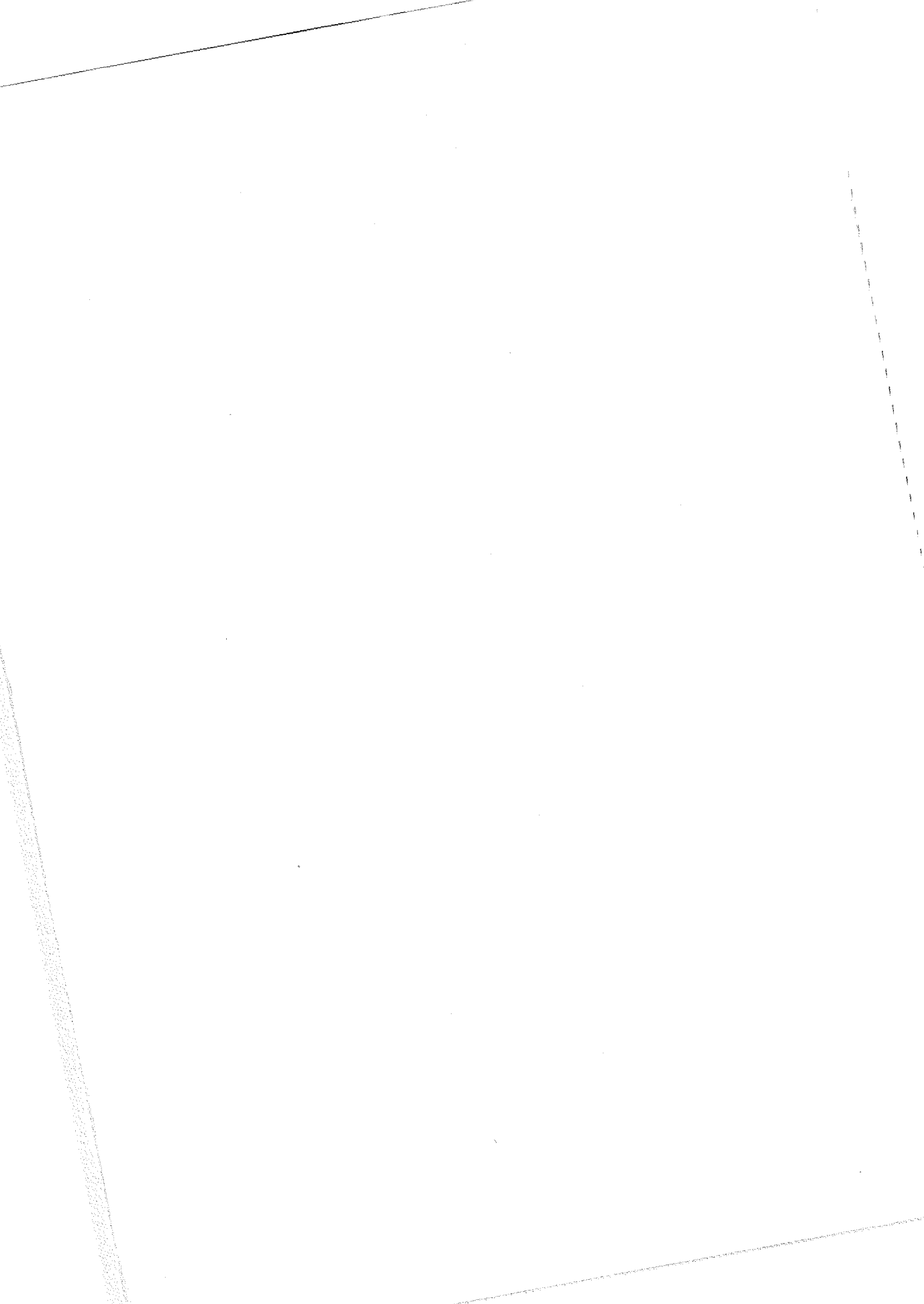
岩手県文化財調査報告 第94集

# 平泉遺跡群範囲確認調査

—第37次柳之御所跡発掘調査報告書—

平成5年3月

岩手県教育委員会



## 序文

柳之御所跡は、昭和44年から62年まで部分的な調査が行われてきましたが、63年より北上川遊水地計画および平泉バイパス建設にともない、事業対象地域を(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと平泉町教育委員会が調査してまいりました。調査が進むにつれて、事業予定地から大規模な堀、塀に囲まれた建物群や井戸跡、園池跡などの遺構や、多量の土器、陶磁器、多種多様な木製品や金属製品等の遺物が発見されました。このような状況に鑑み、この遺跡の範囲等の全容を把握する必要が指摘され、岩手県教育委員会としては文化庁の指導のもとに、建設省の事業地のみではなく、その周辺地域に対して遺構の分布状況の把握、遺跡の範囲および中心地域推定の資料を得るために範囲確認調査を実施することに致しました。調査は国庫補助を受けて平成4、5年の二年計画で実施する予定で、今年度は約1万㎡の地域を対象に実施しました。

調査の結果、溝跡、塀跡、井戸跡、建物跡、柱穴、土壇などの遺構や、多量のかわけ、陶磁器類の遺物が発見され、その規模や性格をより詳細に推定する資料が得られております。

最後になりましたが、調査や報告書作成にあたりご指導、ご援助をいただきました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、文化庁記念物課、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会をはじめ関係各位に感謝申し上げます。

平成5年3月

岩手県教育委員会

教育長 高橋 健之

## 例言

- 1 本書は、岩手県教育委員会が平成4年度に実施した柳之御所跡範囲確認調査の概要報告である。なお、本事業は国庫補助金の交付を受けて実施したものである。
- 2 本事業は、岩手県教育委員会と平泉町教育委員会が調査主体となり実施したが、県教委の調査を第37次調査とし、平泉町の調査を第36次調査とした。36次調査の結果については平泉町教育委員会より刊行予定である。<sup>で7ー</sup>
- 3 出土遺物の鑑定については次の方々の御教示を賜った（順不同）。

国立東京博物館	矢部 良昭
太宰府市教育委員会	山本 信夫
(財)岩手県埋文センター	三浦 謙一
平泉町教育委員会	本沢 慎介、八重樫忠郎
- 4 遺構の略称は、掘立柱建物-SB、塀跡・柱列-SA、溝跡-SD、井戸跡-SE、土壇-SK、柱穴-Pの記号を用いている。

遺構名の記載については、調査が多年度・多数に渡るため、調査次数を最初に付してある。 例：37SD3 - 第37次調査の3号溝
- 5 図版、写真図版の中の遺物番号は共通であり、遺物一覧表の番号も同様である。
- 6 本遺跡の調査、整理は岩手県教育委員会文化課、課長補佐相原康二・主任文化財主査小田野哲憲・文化財主査熊谷常正・同中村英俊が担当し、編集は小田野が担当した。
- 7 本遺跡の調査で得られた記録および出土品は、岩手県教育委員会文化課が保管している。
- 8 範囲確認調査の性格上、遺構の精査は実施しておらず、また調査自体が平成5年度にも予定されているので、今年度は調査対象地域をより広く求めることに主眼をおいた。したがって、個々の遺構についての考察、分析等については、平成5年の調査をまっけて併せて報告する予定である。

# 目 次

序 文  
例 言

## I 調査概要

1. 遺跡の位置と環境…………… 5
2. 調査方法…………… 5

## II 検出された遺構と遺物

1. A地点の遺構と遺物…………… 9
2. B地点の遺構と遺物……………11
3. C地点の遺構と遺物……………11
4. D地点の遺構と遺物……………12
5. E地点の遺構と遺物……………12
6. F地点の遺構と遺物……………14
7. G地点の遺構と遺物……………14
8. H地点の遺構と遺物……………17
9. I地点の遺構と遺物……………19

## III まとめ

1. 遺構について……………21
2. 遺物について……………23
  - (1) かわらけ……………23
  - (2) 陶磁器類……………24
  - (3) その他……………25
3. おわりに……………43

## 図版目次

第1図	柳之御所跡位置■及び遺跡範囲と調査地区	6
第2図	第37次調査区地形図、グリッド・トレンチ配置■	7.8
第3図	A地点遺構配置図、断面図	10
第4図	B地点南北トレンチ平面図、断面図	11
第5図	C地点遺構配置図、断面図	13
第6図	D・F地点遺構配置図	15
第7図	G地点遺構配置■	16
第8図	G地点SE1(井戸状遺構)平面図	17
第9図	H地点遺構配置図	18
第10図	I地点トレンチ配置図、遺物	20
第11図	C地点溝出土かわらけ(1)	26
第12図	同 (2)	27
第13図	同 (3)	28
第14図	同 (4)	29
第15図	C地点溝出土国産陶器	30
第16図	A地点東側溝出土遺物	31
第17図	G地点SD8溝出土遺物	32
第18図	G地点出土遺物	33
第19図	G地点SD9出土遺物及び調査区内出土瓦類	34
第20図	G地点遺構外出土遺物(かわらけ)	35
第21図	同 (国産陶器1)	36
第22図	同 (国産陶器2)	37

## 写真図版目次

第1図版	調査区全景	45
第2図版	A地点東側溝断面	46
第3図版	C地点溝	47
第4図版	G地点遺構(1)	48
第5図版	同 (2)	49
第6図版	同 (3)	50
第7図版	同 (4)	51
第8図版	G・H地点遺構	52
第9図版	H地点全景、遺構	53
第10図版	各調査地点の近・現代の遺構	54
第11図版	かわらけ(1)	55
第12図版	同 (2)	56
第13図版	同 (3)	57
第14図版	国産陶器(1)	58
第15図版	同 (2)	59
第16図版	同 (3)	60
第17図版	同 (4)	61
第18図版	同 (5)	62
第19図版	瓦および国産陶器	63
第20図版	中国産陶磁器	64

## 表目次

表1	かわらけ(1)	38
表2	かわらけ(2)	39
表3	かわらけ(3)	40
表4	国産陶器	41
表5	中国産陶磁器	42



# I 調査概要

## 1. 遺跡の位置と環境

柳之御所跡は北西-南東に細長く、長さ750m、最大幅約200m、面積は約10万 $\text{m}^2$ である。遺跡は北上川の河岸段丘面に立地し、標高は22~37mで範囲確認調査区の北東側は北上川によって侵食を受け、その接点は急な崖になっている。北西側は高館跡が位置し、南西側には猫間ヶ淵跡が当遺跡と平行している。この猫間ヶ淵のさらに西側には特別史跡無量光院跡が位置している。南東方向には伽羅之御所跡が位置しているが、住宅が密集しており、狭い範囲を過去数回、平泉町教育委員会が調査しているが、範囲、実態等については殆ど不明である。

これらの遺跡と接して、近辺には瓦窯跡を有する鈴沢遺跡及び鈴沢之池跡、平泉町~~役場~~周辺に位置する志羅山遺跡、藤原国衡、隆衡の館跡と伝えられ大形建物跡が検出された平泉小学校周辺、伽羅之御所跡と地続きの泉屋遺跡などがある。これらの遺跡はほぼ2km四方の範囲におさまり、平泉遺跡群の中核地帯をなす。中尊寺はこの遺跡群の北辺に位置する。

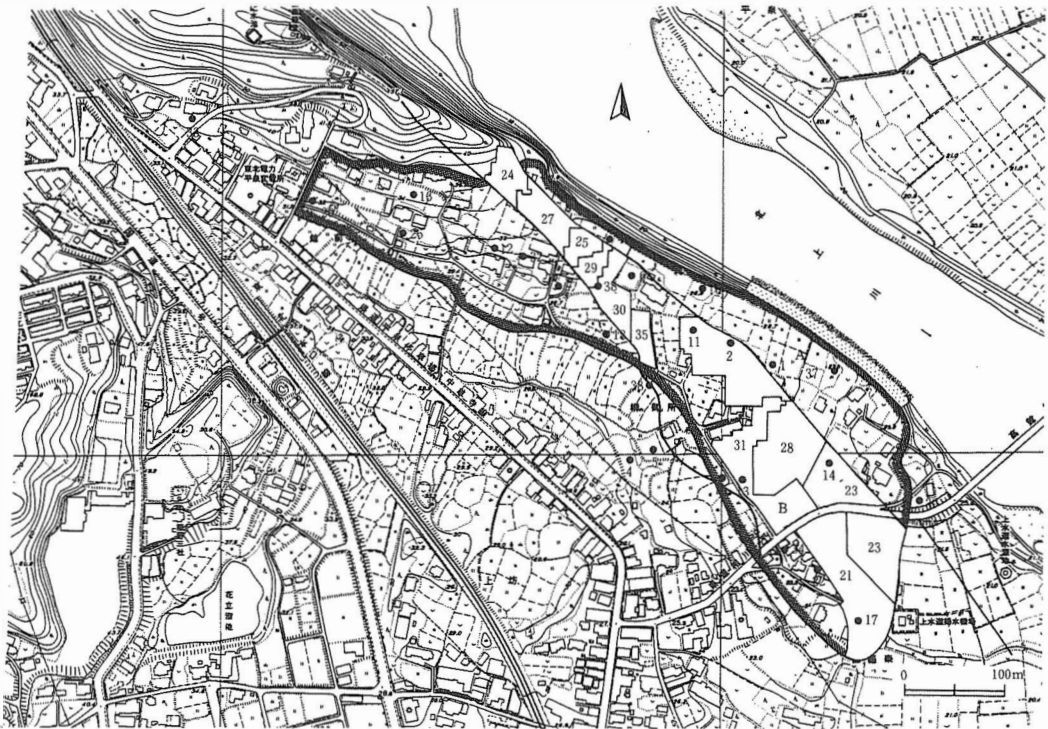
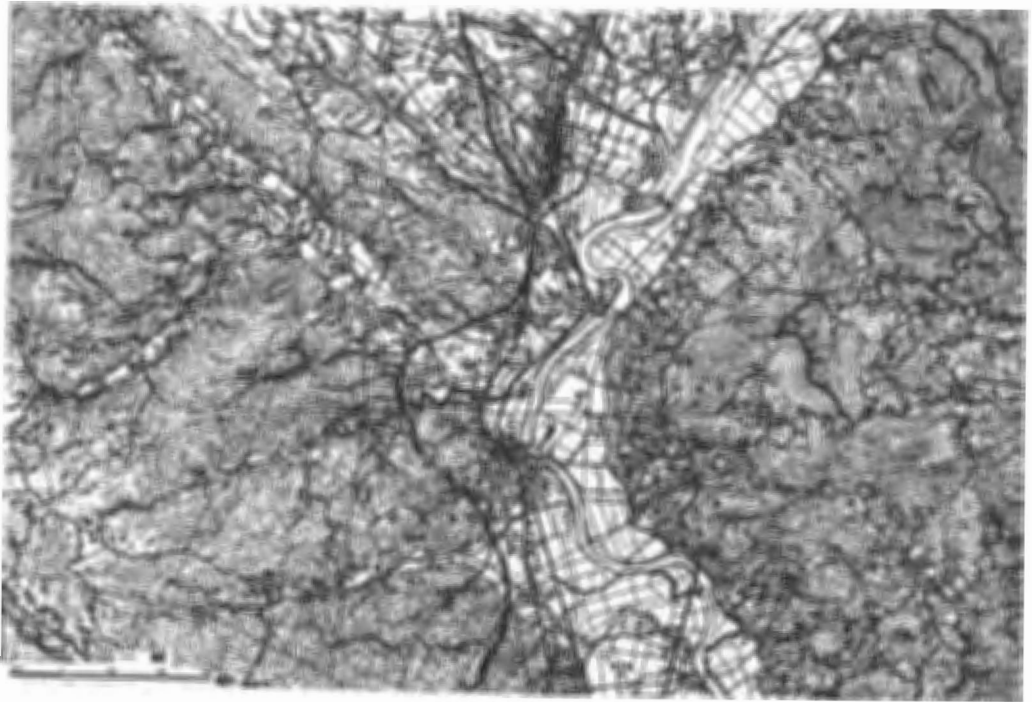
柳之御所跡の発掘調査は昭和44年から始められ、当教育委員会の範囲確認調査は第37次調査に相当する。昭和63年から開始された建設省による平泉バイパス・一閑遊水地事業に係る(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの大規模調査により、当遺跡は南側半分は大きな堀によって分けられ、北側半分はいくつかの溝によって区画されることが判明した。即ち、堀の内側と外側とに判然と区別されることが明らかにされた。また、従来柳之御所跡は藤原清衡、基衡の厩館跡と伝えられていたが、出土する遺物は12世紀の後半、三代秀衡を中心とする時期であることが明らかにされつつある。

岩手県教育委員会は、このような状況に鑑み文化庁の指導のもとに、遺跡の範囲および中心地域推定の資料を得るために、範囲確認調査を実施することとした。

## 2 調査方法 (第2図)

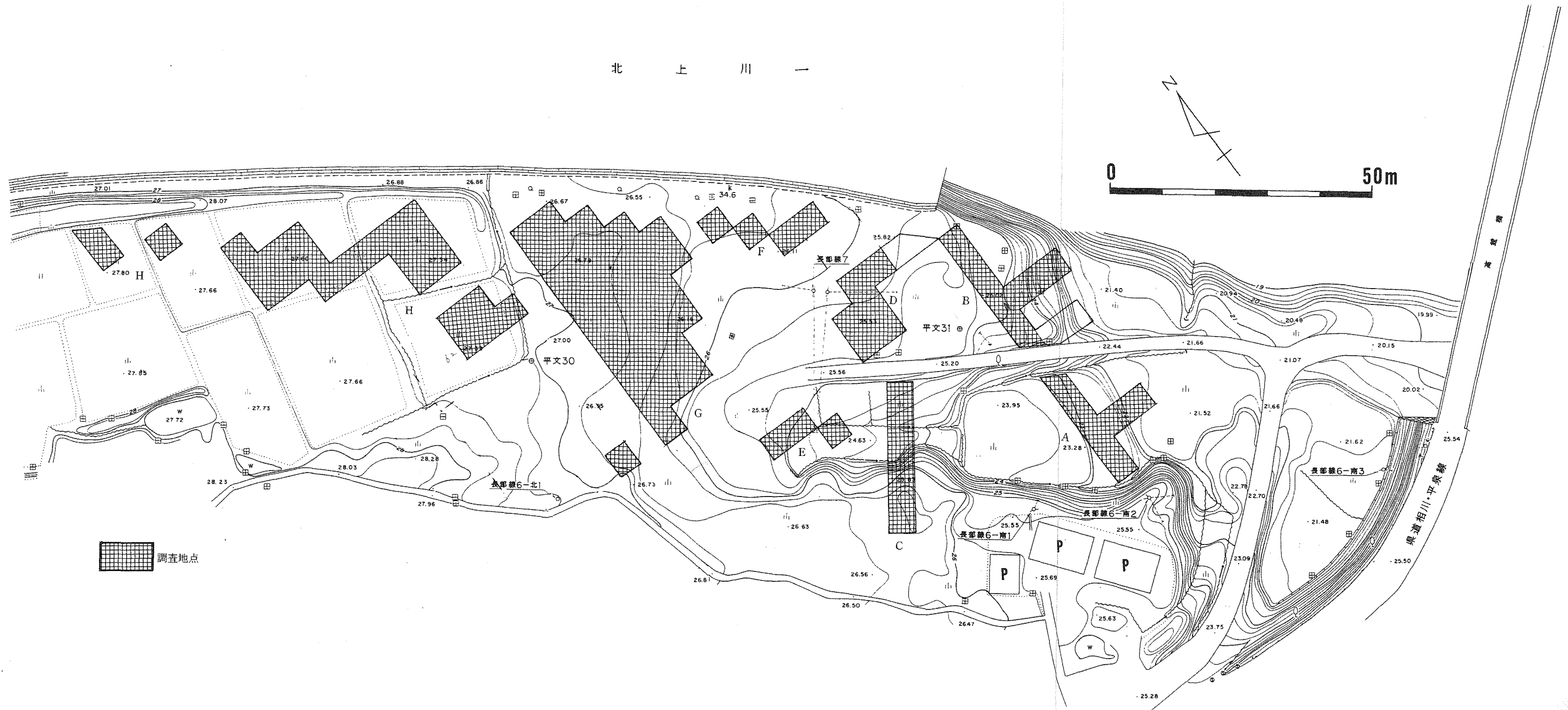
今年度の調査区は、柳之御所跡の東側、北上川に沿った細長い地域約10,000 $\text{m}^2$ を対象とした。調査区全体を平面直角座標第X系に準拠した5×5mのメッシュによるグリッドあるいは必要に応じてトレンチを設定して調査を行った。調査地点の座標については平文30がX=-111932, 377m Y=25099, 270m、平文31がX=-111976, 435m Y=25168, 030mである。対象地域は約10,000 $\text{m}^2$ であるが、A~Iの9地点で遺構の有無の確認を行った面積は2,060 $\text{m}^2$ である。範囲確認調査の性格上、遺構の精査は必要最小限の部分を除いて実施しておらず、プランの把握で留めてある。

今年度の調査の目的は主として、埋文センター調査区の隣接地及び北上川沿いの地域での遺



第1図 上：柳之御所跡位置図、下：遺跡範囲と調査地区（数字は調査回数）

北 上 川 一



第2図 第37次調査区地形図及びグリット・トレンチ配置図

構の分布状況の拡がりの確認、高館橋に近い遺跡の東南端の斜面部の遺構の有無を確認することにおいた。そのため、北上川と埋文センター調査区の帯状に拡がる地帯に任意にグリッド及びトレンチを設定し、確認調査を行った。調査地点は西から東側に15地点にわたるが、説明の都合上、それぞれに地点名を付し、記述は東から西側の順に行う。

## II 検出された遺構と遺物

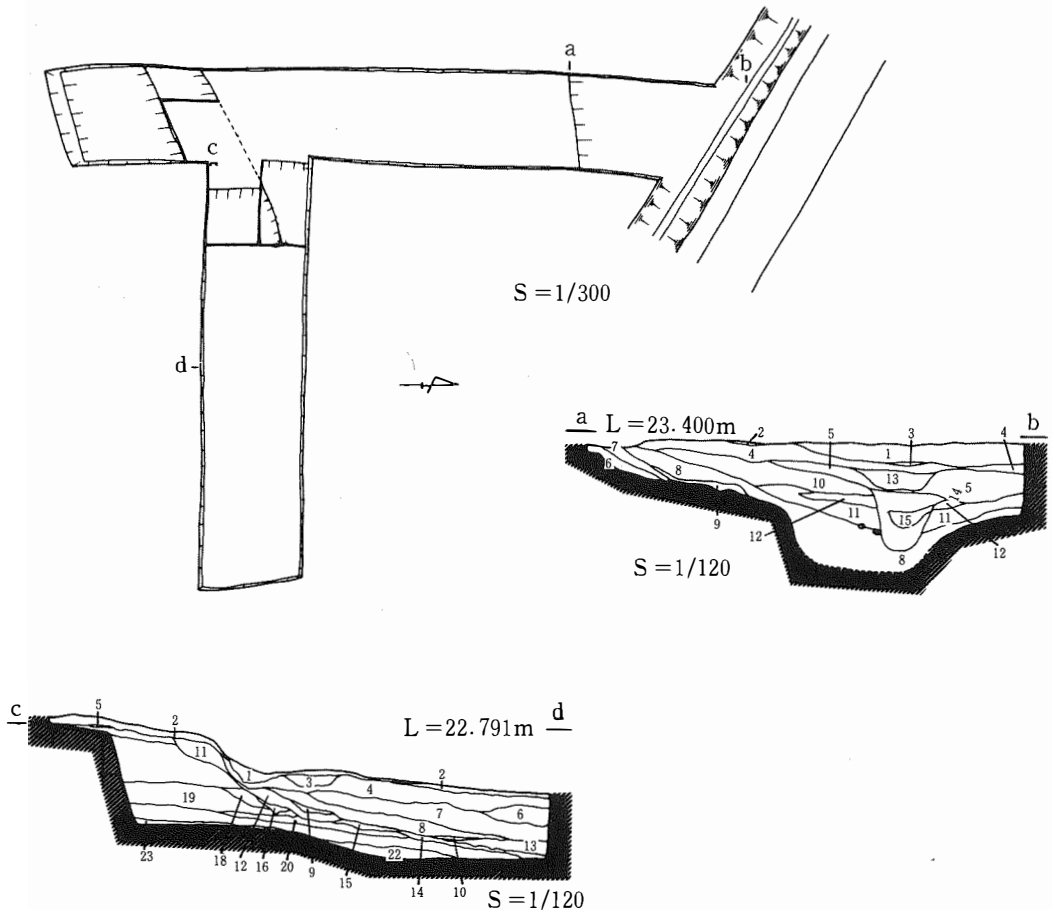
### 1. A地点の遺構と遺物（第3、16図 写真第2図版）

遺跡の東端で、西側の平地部から北上川に向けてなだらかに傾斜する部分に位置している。南北のトレンチは27m、東西のトレンチは17mの長さである。遺構は東西トレンチの両側でそれぞれ溝が検出された。北側のそれは、埋土中に近代の陶器やガラス片、土止板などが検出され、近世以降の溝と判断した。流水によって運ばれた摩滅したかわらけが少数出土した。北側の溝は、C地点で検出された溝につながるもので、検出面での幅は8m以上であるが、北側道路のため北端は確認できなかった。下幅は2mと推定される。深さは地表から2mまでは確認しそれ以上は湧水が激しく、調査できなかった。埋土16層に分類したが、3層に大別できる。下層の8、11、12層は自然堆積で、11、12層には水の流れた痕跡があり、摩滅したかわらけが出土する。最下層の8層はかわらけ、陶器類が多く出土しており、遺物が廃棄された状況を示している。この3つの層を載って14、15層が水路として使用された時期があり、その後人為的に埋められている。14、15層の時期は不明であるが、12世紀よりは新しく、埋土にはかわらけ片が少量含まれている。5層は人為的に整地された層で、その一部がさらに水路となっている。この部分は地形的に、降雨があれば自然に流路となるところであり繰り返し水が流れている。5層より上は近現代の地層である。

北側溝

東西トレンチは北上川に向けて設定し遺構検出につとめたが、遺構、遺物とも無く、特に標高22m以下では水性の砂層と粘土層が互層をなしているのみであった。

遺物は、主として北側の溝からで量を別とすれば各層から出土するが、8層を除くと流れ込みあるいは水に運ばれたものが殆どである。8層のかわらけは量的には最も多いが完形品は少なく、小型のもの数点実測できたのみである。ただし、小型のかわらけが多いという意味ではなく、てづくねのやや大型のかわらけも当然含まれている。（範囲確認調査で得られたこれらの数量、割合については平成5年度の最終調査のさいに報告する予定である。）国産陶器は常滑、渥美甕の破片が10点ほど出土している。



1. 近現代のゴミ焼の痕。炭化物、ゴミでいっぱい。10R 1. 7/1
2. 表土 (7.5YR3/1) 砂っぽく、しまりなく、細かな粘土ブロック含む。
3. 7.5YR3/3砂質の攪乱層 (卵のカラ、ビニール等入る)。
4. 10YR3/2やや粘り気ある比較的しまった砂~シルト。カワラケ、炭化物を含むが、ビニール紐、ガラス片もあり、近現代のもの。
5. 炭化層 (新しい)。
6. 7.5YR4/4シルト質の砂。下部は一部酸化して赤くなる。ややしっとりした感じで、粘り気あり。
7. 7.5YR3/3シルト質の砂、炭化物含む。カワラケ微細片も含む。
8. 7.5YR3/4シルト質、しまる。炭化物極めて少量含む。
9. 7.5YR4/4酸化したシルト、しっとりとする。
10. 7.5YR3/4小円礫を含む砂層、ザラザラして、しまりなし。
11. 2.5Y5/6砂質粘土のブロックからなり、一部表土の黒っぽい土が混じる。崩壊による再堆積土か。
12. 7.5YR3/3シルト層、極小の円礫、カワラケ片を含む。ややしまる。
13. 7.5YR3/2シルト質、粘り気あり、しまる。
14. 2.5Y4/6砂層、固くしまる。ややシルトっぽい。
15. 2.5YR4/6砂層、小円礫を含む。
16. 7.5YR3/3砂層、小円礫含み、しまりなし。
17. a 砂層 2.5Y6/4 bの上は粘土質、下部に行くにつれ砂質となる。一部酸化する。(基盤層) 以下基盤層である。
18. 小円礫を含む砂層、一部シルトっぽいところがある。(2.5Y6/4)
19. 小円礫を多量含む、酸化した砂層 (10YR5/8)。
20. 砂層 (2.5YR6/3)。
21. 砂層、小円礫を多量含む、しまりなし (2.5YR6/4)。
22. 砂層 (7.5YR4/6)。
23. 酸化した砂層 (7.5YR5/8)。
1. 5YR3/3畑耕作土。
2. 10R3/4焼土投げ捨て。
3. 5Y3/1灰、炭投げ捨て。
4. 7.5YR2/3耕作土。
5. 10YR5/4地山ブロックの埋戻し (整地)、新しい。
6. 7.5YR4/3やや砂質、遺物少量 (古い土)。
7. 7.5YR4/4粘土質、遺物殆ど無し。
8. 10YR4/4砂質、低い方は遺物多量を含む。
9. 10YR2/3かたく、はりのある黒土、遺物少量含む (水につかっていた土)。
10. 7.5YR3/2かたく、はりのある黒土、遺物少量含む。東側攪乱の為、この層は見当たらない。
11. 7.5YR2/1しまりのある黒色土 (水性か)。東側、地山ブロック混る。
12. 7.5YR4/3小さな地山ブロック混る。遺物少量。
13. 10YR6/4水路跡に地山ブロック埋戻し。
14. 10YR6/4水路跡に地山ブロック埋戻し} 新しい攪乱
15. 7.5YR2/2水路跡に埋戻し。 (水路か)
16. 地山
  - 8層と11層の低い方の境目に礫混る。
  1. 2. 3. 4. 5. 13. 14. 15後世の層、他は生きてる層。

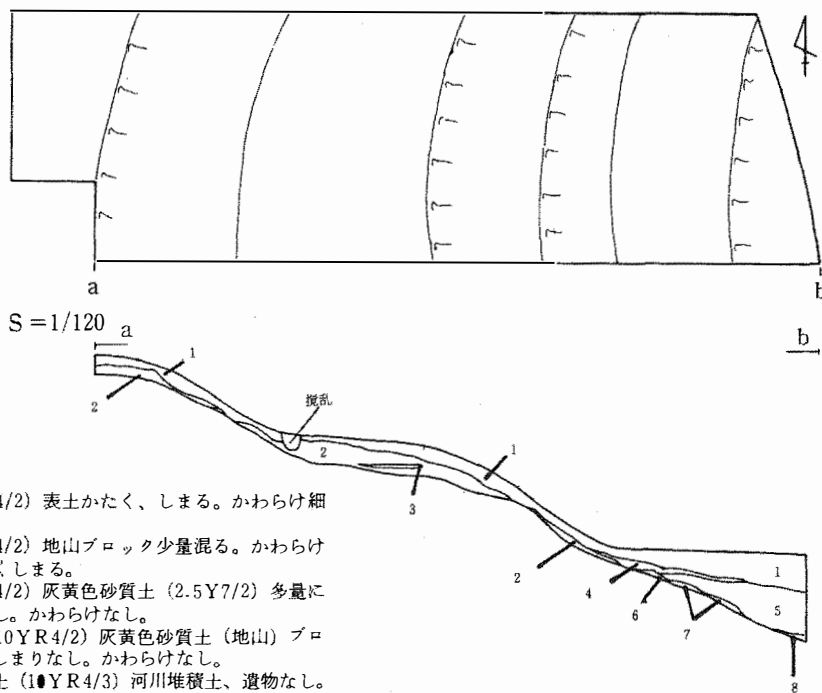
第3図 A地点遺構配置、断面図

## 2. B地点の遺構と遺物 (第4図)

今年度調査区の最も東側に位置し、平坦面から北上川に向かう地点に設定した。斜面部はA地点東西トレンチと同様遺構は無く、遺物の流れ込みも認められず、北上川により流失した可能性が高い。平坦部にも明瞭な遺構は検出できなかった。遺物は表土中から摩滅したかわらけ片数点が出土したのみである。

## 3. C地点の遺構と遺物 (第5、11~15図 第3、14~16図版)

この地点のみ座標とは関係なく、溝に平行に30mのトレンチを設定した。溝はトレンチのほぼ中央に検出面で幅12mが確認されたが、溝としての落ち込みが確認されるのは約6.5mである。深さは湧水が激しく確認できなかったが、下層の無遺物層(51層)では十和田a火山灰と推定される火山灰が確認されており、この地点が藤原氏以前にすでに沢地形となっており、ある程度土砂が堆積した時点で12世紀に溝として使用されたものと推定される。溝の西側は幾度か水路となっている痕跡が認められるが、時期は新しく近世陶器などが遺物として含まれている。また、地形的に常に水が流れる箇所であり、ドライ化した粘土層が多く確認されている。西側の新規の流路をのぞくと殆どの層からかわらけと■産陶器が出土するが、層位的にみると



1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 表土かたく、しまる。かわらけ細片ほとんど含まず。
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 地山ブロック少量混る。かわらけ細片ごく微量、かたくしまる。
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) 多量に含む。ややしまりなし。かわらけなし。
4. 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 灰黄色砂質土 (地山) ブロック少量混る。ややしまりなし。かわらけなし。
5. にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 河川堆積土、遺物なし。ややしまりなし。
6. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) 地山、しまりなし。かわらけなし。
7. にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 灰黄色砂質土ブロック少量混る。しまりなし。遺物なし。
8. にぶい黄褐色砂層 (河川堆積) 少量礫混る。しまりなし。遺物なし。

第4図 B地点南北トレンチ平面図、断面図 S=1/120

多量の遺物が出土する44、46層の上の43層は遺物を含まない地山のブロック土で埋め戻された整地された層である。その整地面をさらに水が何回となく流れた痕跡がある。41、42層は43層の整地層を削っているが、木製品を含む多量の遺物が発見されており、下層と同じ12世紀の層と考えられる。47～49層は流路の跡であるが、含まれている遺物はかわらけ、国産陶器のみであり、8、9層も同様の遺物を含んでいるが、12世紀に属する積極的な証拠に乏しい。

遺物は最下層からと整地層の上面から最も多く出土しており、11、12層からは木製品の破片、自然木、くるみ、とち、桃の種子などの植物遺存体が含まれている。かわらけは下層のものほど糸切り底が多く、中層（整地層の上）から手捏こねが多く含まれる傾向が認められる。国産陶器は渥美、常滑産の他に須恵器、須恵系土器、瓦などがあり、これに少量の中国産白磁が加わる。

#### 4. D地点の遺構と遺物（第6図）

B地点の西側に位置し、6グリット150㎡を検出した。この調査区はF地点に見られる擁壁工事の際に、重機による土取り、削平を受け保存状況は極めて悪く、遺構の上面はキャタピラー等によって削平されており、遺物も破砕されたかわらけ片が出土したのみである。したがって遺構の保存状況も悪く、明瞭ではないが20数個の柱穴痕を検出できた。径20～30cm前後のものが多く、2棟以上の建物跡があったと推定はできるが、削平が著しく断定はできない。1棟は桁行き11.0m、梁行6.0mと推定され、ほぼ南北の方向性を示すが、間尺がわかるような検出状況にはなかった。これと重複して桁行2間、梁行1間の建物があるが、新旧関係は不明である。この2棟の東側に建物の一部と推定されるコーナーが二重に検出されているが、それ以上の追跡調査は行わなかった。今年度の調査によって検出された建物では最も南側に位置しているが、柱痕跡からすると大規模な建物とは考えられない。

遺物は先述したとおりなので、ごく細かに破砕されたかわらけと国産陶器で、図示できる資料はなかった。

#### 5. E地点の遺構と遺物（第2図）

C地点トレンチ西側に3グリット75㎡の調査区を設定、当初は溝の追跡を目的としたが表土を除去した段階で、地山の土を用いた整地層（面）を検出した。検出面としては最上位面に相当するが、範囲はこれ以上確認しなかった。C地点でも地山の土を用いた整地層を確認できたが、この整地と同一か否かは不明であるがレベル的には異なる。

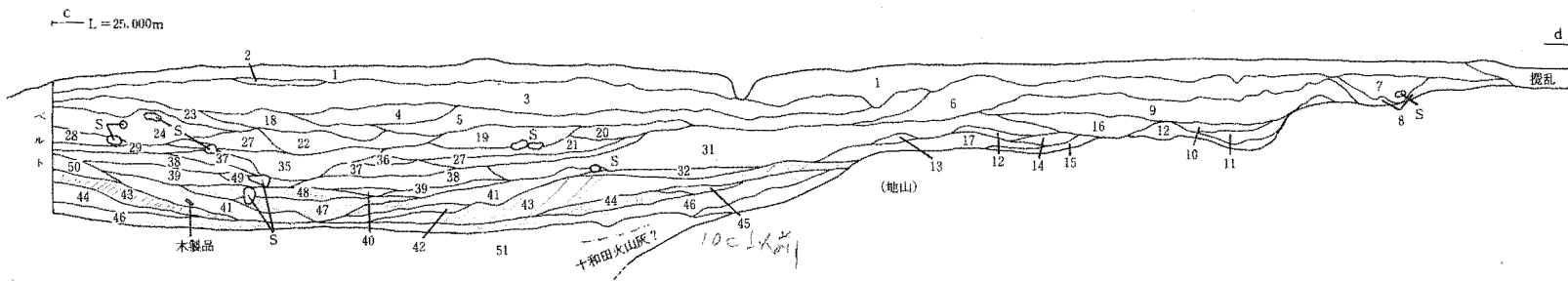
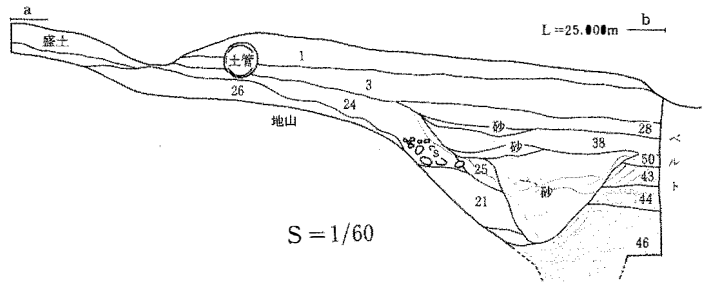
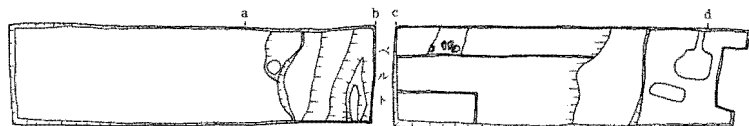
遺物は表土からかわらけの破片が出土したのみである。

層注記

1. 10YR3/3暗褐色砂質層表土、耕作土砂、小礫、カラワケ微細片を含む。バサバサ。
2. 10YR3/3暗褐色砂質層1層よりやや黒味が強い。バサバサ。
3. 7.5YR4/3砂っぽい、カラワケ微細片、小粒の炭化物を含む。バサバサ、しまりやや弱し。
4. 7.5YR4/3カラワケ比較的多く含む酸化鉄の固まりが入る(少し)。
5. 7.5YR3/3やや黒味強い、少ししまる。カラワケ微細片、炭化物含む。砂っぽい。
6. 7.5YR4/3褐色土層粘土小ブロック、炭化物、小礫、カラワケ微細片が含まれる。やや砂っぽい。しまる。
7. 7.5YR4/3褐色土層粘土小ブロック(1~2cm)が6層と比べ大きい。基本的には6層に同じ。炭化物やや多い。

8. 7.5YR4/2を基準に10YR8/8ぐらいの粘土ブロックが入る。埋め戻し上の性格か、特に右側にブロックが多い。……新しい?
9. 7.5YR3/3砂っぽく、やわらかい、ややしまりなし、カラワケ微細片入る。炭化物も少ないが入る。……新しい?
10. 10YR3/2砂っぽく一部赤褐色化(酸化)したシルト質の砂がブロック状に入る。炭化物、カラワケ微細片あり、バサバサ。
11. 7.5YR3/3炭化物やや多し、小さな粘土ブロックも含む。砂っぽい。
12. 10YR3/2粘土ブロックを比較的多く含む。カラワケ細片含む。しまる。
13. 10YR3/2 12と比較し、カラワケ、炭化物多い。粘土ブロックは少なくなる。砂っぽい。
14. 7.5YR3/1やや砂っぽいものの、粘性が増し、炭化物を含む。
15. 7.5YR2/2大きな炭化物を含む。粘性が強い。下は、粘土ブロックも多い。

16. 7.5YR3/3砂質、カラワケ小片、やや大きな(1~2cm)の炭化物を含む。バサバサ。
17. 7.5YR2/2カラワケ小片を含む。炭化物も多い。
14. 15. 17は砂っぽさが強く、粘性が強く、上層とは明確に区分可能。
18. 7.5YR4/3炭化物。
19. 7.5YR4/3カラワケ細片、小礫を多量に含む。砂っぽい。
20. 7.5YR3/3小さな粘土ブロック、炭化物を含む。
21. 7.5YR3/3小礫を含む。酸化した砂を含む炭化物やや大粒。
22. 7.5YR3/4礫カラワケを多量に含む。炭化物も少し含む。
23. 7.5YR3/4炭化物、カラワケを含む。砂っぽい。
24. 7.5YR3/4カラワケ、礫も多量に含む。
25. 10YR4/2砂層ラミナ状の堆積、水成起源か。
26. 10YR4/2砂層上位は酸化している。
27. 10YR3/3やや粘性を帯びる炭化物。粘土小ブロックを含む。
28. 10YR3/3カラワケ多量、やや炭化物多い。
29. 10YR3/3炭化物大型、カラワケ含む(基本的には28層に同じ)。
30. 7.5YR3/3粘土小ブロック炭化物を含む。やや粘り気あるが基本的には砂っぽい。
31. 7.5YR2/2、やや粘土質、12Cの土、遺物含む。
32. 7.5YR2/3しまりあり、炭化物含む。
33. 10YR6/4、整地層。地山ブロック、遺物含まない。
34. 2.5Y5/3灰白色のソルト質、炭化物含む。
35. 5YR3/6底面酸化してサビ色。カラワケ、小石多量に含む。流水路。
36. 5Y4/1グライ化した粘土と一部酸化した粘土、水性堆積。
37. 5Y3/1グライ化した粘土と細い砂混り。
38. 10YR2/2粘性あり、細かい砂少量含む遺物多し。
39. 10YR2/3炭化物。細かい石灰 or 雲母混り、炭、木製品の破片を含む。
40. 2.5Y5/3水性粘土、水性植物の根混る。
41. 10YR2/2砂少量含む。粘性あり。
42. 10YR2/3 9層に内容同じ。
43. 10YR6/4地山埋戻しの整地層。遺物なし。水流で切断されている。
44. 2.5Y3/1植物根混り、水性の土。上面に地山のブロック混る。
45. 10YR3/2砂少量混り、粘性あり。
46. 5Y2/1植物根多量に含む。水性粘土質(土師器出土)。
47. 5Y3/1グライ化した粘土に砂多量に混る。流路の土。
48. 2.5Y4/1グライ化した粘土にやま粒の荒い砂多量に混る。流路の土酸化して一部にサビ色。
49. 2.5Y3/1グライ化した粘土、荒い粒の砂(小砂利)混り。流路。
50. 2.5Y3/1植物根、砂を含む。
51. 5Y3/1水性堆積土、無遺物、層厚不明(十和田火山灰?を含む)。
52. 地山。



第5図 C地点遺構配置図、断面図



## 6. F地点の遺構と遺物（第6、7図）

北上川沿いに4グリットを設定した。現在この川際は昭和40年代に造られた幅約2mのコンクリートの擁壁に守られているが、その工事の際に削平された部分が、擁壁の内側幅約8～10mにわたっている。また、削平された部分の南側も工事の際の重機等により攪乱を受けている。この状況は擁壁の存在する部分一帯に共通である。ここのグリットでは削平された部分から数基の小さな柱穴状の掘り込みが検出された。攪乱された地点からは遺構は検出されなかった。

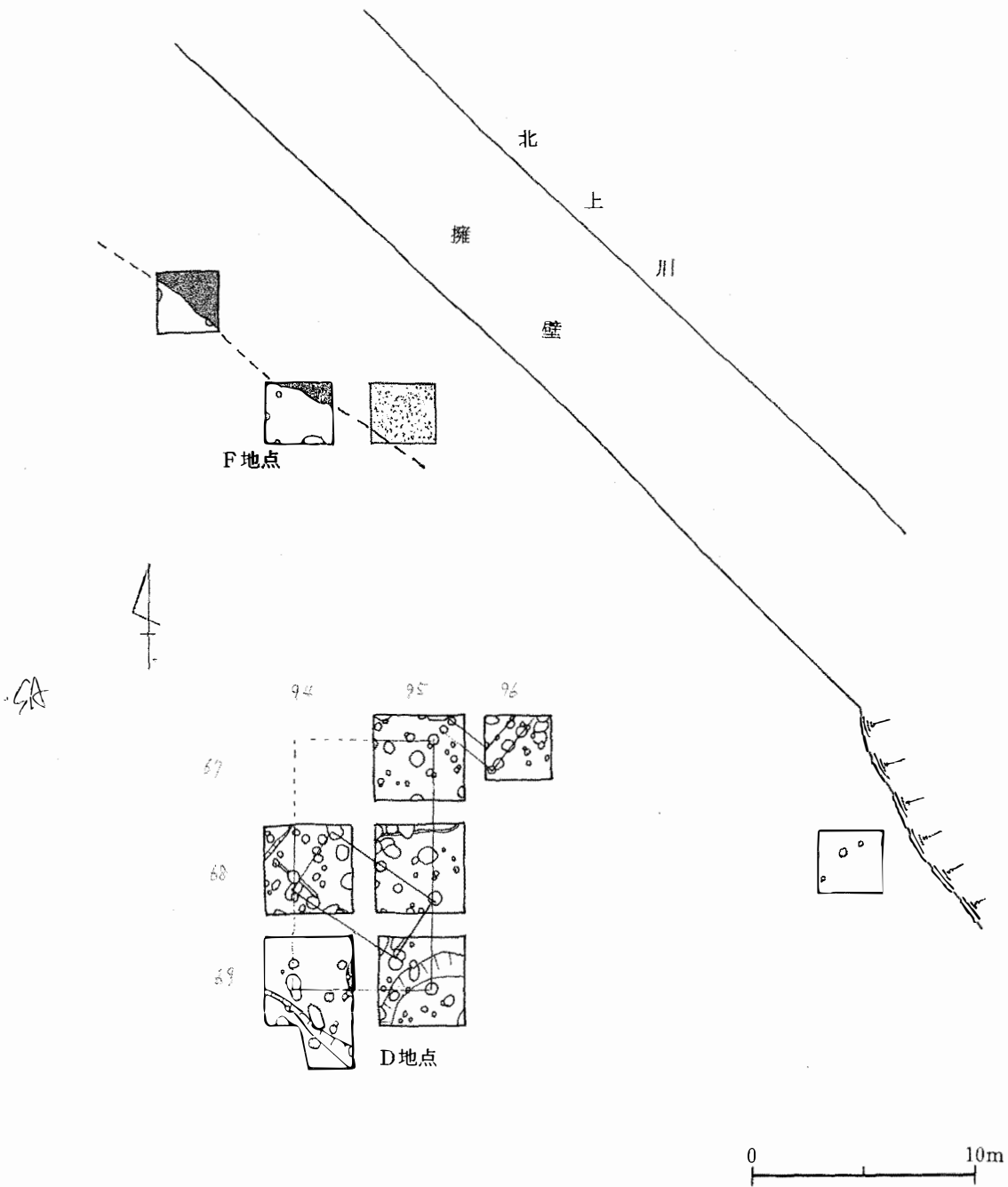
D地点と比較して、もともと遺構の少ない地域と推定される。

遺物はD地点の状況に同じである。

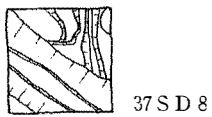
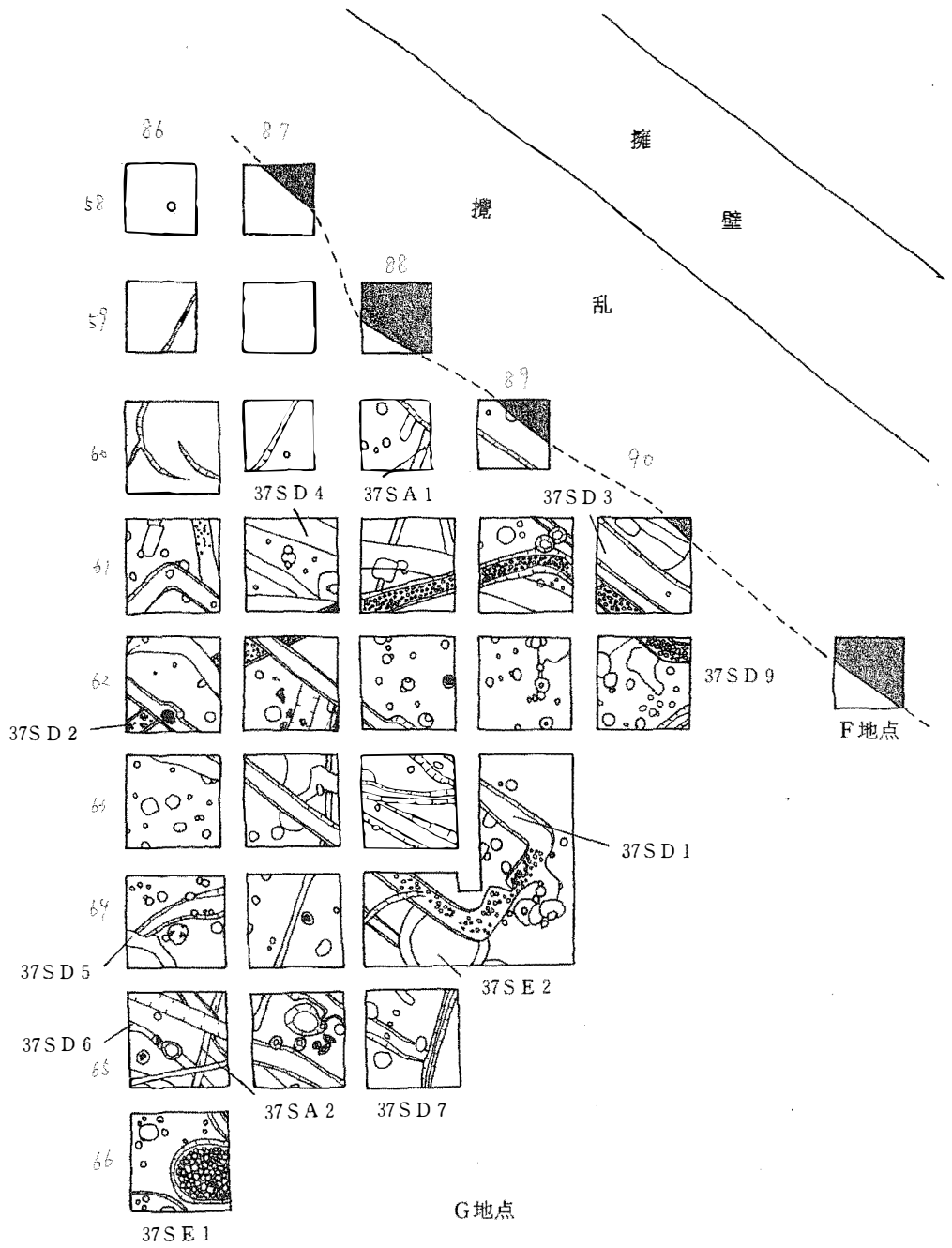
## 7. G地点の遺構と遺物（第7、8、17～22図 第4～8、11～20図版）

今回の調査で最も遺構と遺物が集中していた地区であり、時代は別にして良く保存されていた地区でもある。遺構は現代の住宅に伴うものから、藤原時代にまで及んでいる。溝が最も多くSD1～8までであるが、1の20×6mの長方形のものと、次いで2の礫を伴う暗渠と、3の擁壁工事の削平ラインの溝が時期的には新しく、近現代に属する。4～7は埋土の状況、遺構の重複関係から判断すると12世紀のものだと判断されるが、それぞれの遺構を面的に追跡していないので、性格については不明である。溝の他に塀跡と推定される遺構が2条検出されている。SA1はN-17°-Eの方向で検出した。長さは26.5mで、北側は溝に截られており、南側は途中で切れている。先端まで掘り方があり、この部分で完結していることは明らかであり、東西方向にも展開はしていない。ここの遺構群のなかでは最も古い時期に属しており、あらゆる遺構に截られている。ただし、この塀跡に伴うような建物についての資料は乏しい。SD2は1の西側に並行しており、N-16°-Eの方向にある。検出されたのは1グリット内だけで、他では攪乱等で追跡できなかった。SA1との新旧関係は不明であるが、SD7を截っている。井戸あるいは井戸状遺構は2基検出されている。SE1は短径2.7m、長径3.0mの隅丸形状と推定されるプランで、検出面は礫が敷き詰められている。礫の上面を土砂で防いだ痕跡は認められなかった。SE2は1より北東方向14mの地点で検出されたが、礫は伴わない。径3.7mの円形プランである。2基ともプランの検出のみに留めてある。建物跡については棟方向の異なる数棟が考えられる。柱穴は円形と方形の二者があり、柱穴痕のあるもの、無いものがありかつ、精査を行っていないので明瞭な線引きは不可能である。

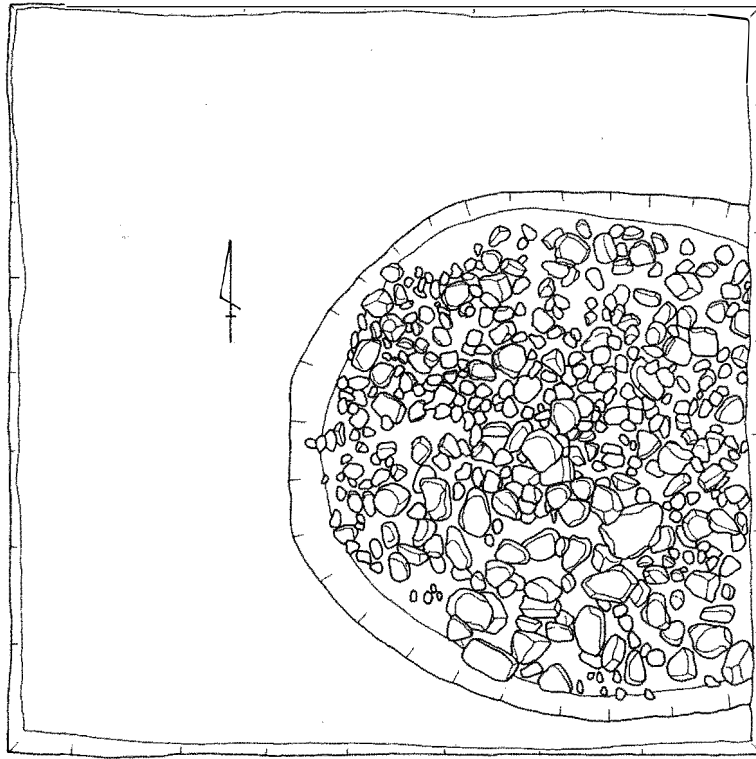
また、大形で柱穴痕の無い遺構は土壌となる可能性もあり、ここの地区の建物の規模、配置等は後世の調査あるいは機会があれば次年度に委ねることとしたい。いずれにしても、この調査区は建物、塀、井戸、土壌、溝等が複雑に重複しており、長期間に渡って活用されていた地域であることは明らかである。ただし北上川に寄るにしたがって遺構、遺物の数が減少する傾



第6図 D・F地点遺構配置図



第7图 G地点遺構配置图



S=1/40

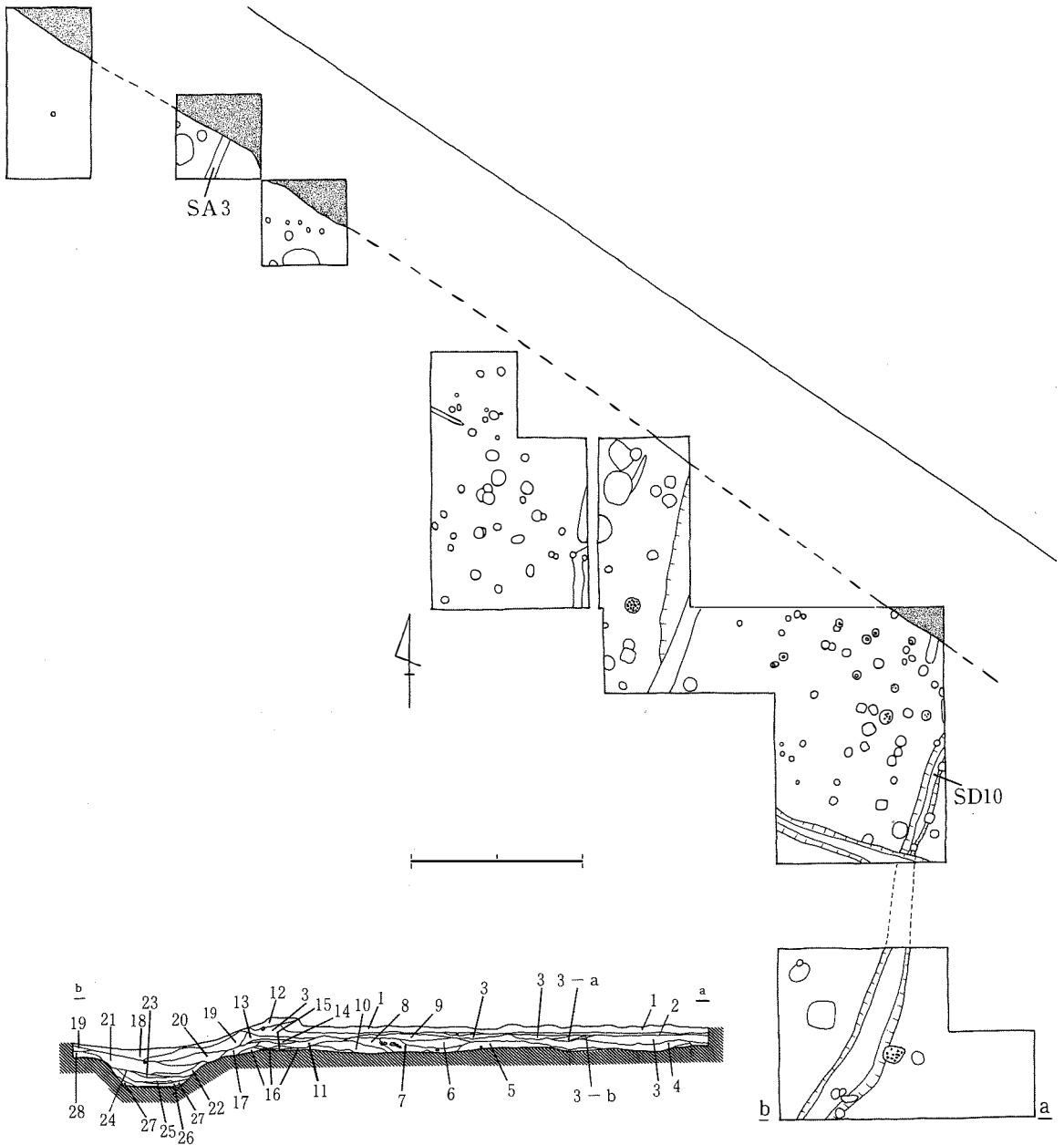
第8図 G地点SE1 (井戸状遺構) 平面図

向が認められる。

遺物は他と同じかわらけ、国産陶器、中国産陶器類などであるが、完形品のかかわりけは主として一部を精査した溝の埋土から出土したものである。

#### 8. H地点の遺構と遺物 (第9図 第9図版)

G地点のさらに北側に20グリット、500㎡を検出した。北上川沿いの擁壁にかかる部分は他と同じく削平されている。検出された遺構は溝が3条、土壇あるいは大形の柱穴と思われるもの4基、塀跡状の細い溝2条、大小の柱穴約60基である。東寄りに位置するSD10は北側が細く、南下するにしたがって幅広くなる。埋土の観察によれば水流の痕跡が認められる他の2条は時期が新しく、塀跡とおもわれる細い溝は検出した範囲が狭いので詳細は不明であるが、SA3は川沿いから始まっており、この遺構が塀と仮定するとある一定の長さが想定されるので、北上川は相当の幅で侵食されたこととなる。また、この周辺の数多くの柱穴が塀との関連を示している。柱穴は大小、円形、方形と様々であり、かつ重複している。このなかには、礫が敷かれているもの、柱痕跡を残すものなどあり、複数期にわたって建物群が存在したことをしめしている。



1. 耕作土。10YR4/2砂質、炭化物、かわらけ細片を含む。しまりなし。
2. 10YR3/2かわらけ細片含む。酸化し赤色化した部分あり砂質。
3. 10YR7/6粘土整地。ブロック状。〔3-a-10YR2/1褐色ブロック(大)を含む下層の土を含む。〔3-b-10YR2/1褐色ブロック(小)を含む
4. 10YR3/3炭化物、かわらけ含む。やや砂っぽい。しまりなし。
5. 10YR2/3炭化物、わずかに粘土ブロック。4層よりしっとり土っぽい。
6. 10YR2/2炭化物少量。かわらけ多く含む。
7. 10YR2/2炭化物、かわらけ多く、湿り気のある土。
8. 10YR4/2粘土ブロック(小)多く含む、炭化物、かわらけ少量入る。
9. 10YR3/2やや砂っぽい。かわらけ、小円礫を含む。
10. 10YR7/6粘土整地(右の新遺構の掘り下げ土か)ブロック状。一部褐色ブロックも入る。
11. 10YR4/2を基本とし、10YR7/6~10YR8/6くらいの粘土ブロック。10YR4/4ぐらいの褐色ブロックが多量に入る整地層。
12. 10YR4/4砂っぽい表土。細かい粘土ブロック入る。
13. 10YR2/3粘土ブロックを幾分含む。かわらけ、炭化物、褐色ブロックあり。
14. 10YR2/3粘土ブロックを多量に含む。11層とはブロックの大きさ、褐色ブロックの量が少ない。
15. 10YR3/3しまった土。炭化物入る。一部褐色ブロックあり。
16. 10YR3/4しまった土。黒っぽいブロックがわずかに入る。
17. 10YR3/2炭化物比較的多く、バサバサ砂っぽい。しまりなし。
18. 10YR3/1小円礫。近・現代の遺物をふくむ。表土、しまりなし。再堆積土。
19. 10YR3/1やや砂っぽい。かわらけ小破片を含む。部分的に粘土ブロック(小)混在。再堆積土。
20. 10YR4/1砂っぽい。炭化物、かわらけ片を多量に含む。粘土ブロックあり。再堆積土。
21. 10YR4/1小礫。かわらけを多量に含む。この層まで草木根が及ぶ。やや砂っぽく、しまりなし。
22. 10YR4/1~5/1。21層に比べて小礫、かわらけは少ない。砂質だがしっとりとした感じ。
23. 10YR2/1炭化物を含む黄褐色粘土ブロックも混じる。やや硬い。
24. 10YR3/2酸化した砂質層。ラミナ状に黒褐色土が入り、その中にかわらけ、炭化物入る。
25. 10YR2/1砂質層だが黒味が強い。
26. 10YR3/2粘土味の強い砂質層。かわらけ、炭化物がラミナ状に入る。粘土ブロック(小)あり。ややしまりなし。
27. 10YR4/1粘土質。壁のくずれと思われる粘土ブロック、かわらけ小片入る。しまりあり。
28. 10YR7/6やや砂っぽい。硬い。

第9図 H地点遺構配置図

出土する遺物は他の地区と同様である。

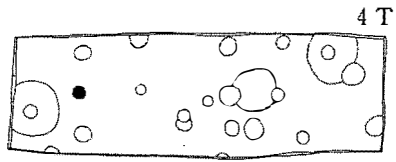
### 9. I地点の遺構と遺物（第10図）

調査区の最も西側に位置している。地形測量を行っていない地点であり、第2図の配置図には記載されていない。H地点のさらに西側約50mに位置し北上川に面している。トレンチを設定した箇所は私有地の畑地のため、任意の方向にそれぞれ幅2m、長さ8mと6mの3本のトレンチを設定し、遺構のプラン検出のみを行った。I地点の正確な位置については、来年この付近を地形測量する予定であるので、平成5年度の範囲確認調査報告書に記載することとする。

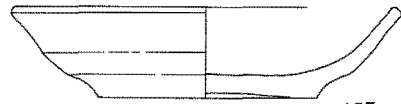
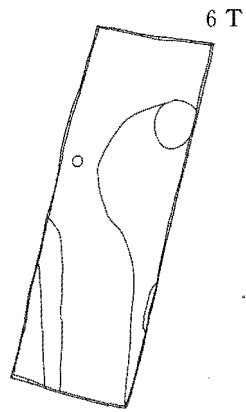
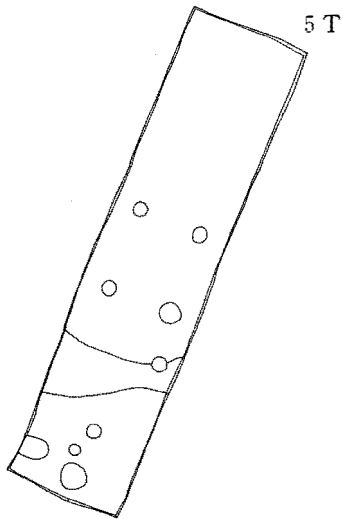
最も北上川に面したT4では大小の柱穴痕が20基ほど検出されたが、小さな柱穴痕は大きな柱穴痕を截っており、すべて12世紀のものとは断定はできない。大きな柱穴痕3基のうち、2基には径20cm前後の明瞭な柱痕跡があり、この地域に大形の掘立柱建物が存在したことを示している。T5からは規則的に配置された4基の小さな柱穴痕やこれより大小の柱穴と推定される痕跡が検出された。T6は攪乱の痕跡が認められたが、東側で径80cmの土壙状のプランが検出された。I地点は他の北上川に接している地点とやや異なり、複雑な地形を呈しており（私有地につき地形測量を実施していない）大形の柱穴痕はこの地形と密接な関連をうかがわせる。

この付近に大形の建物が存在したとすると、T4のすぐ北は崖であり、相当部分北上川に削平されていることとなる。

遺物は、遺構検出のみにとどめざるを得なかったので少なく、図示できたのはT6表土出土のロクロかわらけ1点のみで、他はかわらけの細片のみである。



S=1/120



157



0 10cm

第10図 Ⅰ地点トレンチ配置図、遺物実測図

### Ⅲ ま と め

#### 1. 遺構について

遺構の個々については、検出のみに留めており、精査はごく一部しか実施していないので、調査区の分布状況についてのべる。

調査区の東端、A、B地点では平坦な面においては若干の遺構が検出されたが、それより一段低い面は砂の堆積が著しく、遺物の流れ込みも確認できなかった。土砂の堆積状況は明らかに北上川の流水によることを示しており、この箇所から高館橋付近にかけては旧地形は流失している。北上川に面した北側は昭和40年代後半に長さ約200m、幅7～12mに渡って擁壁工事がなされており、当然その部分は削平されている。また、この工事の際に擁壁の周辺も一部削平をされたり、重機による攪乱の痕跡が見受られたが、特にF地点で著しい。

調査区全体の遺構の検出状況は、南側、即ち埋文センター調査区に近い部分ほど遺構が多く、北上川に近くなるにつれて少なくなる傾向が認められる。このことは遺物の出土状況とも一致しており、擁壁工事による削平に係わらず、本来的に遺構の数が少なかった地域であったことを示している。A、C地点で検出された溝は、G地点の南端でも検出されており、調査区のほぼ東西方向に走っている。A地点の土層から判断すると、この溝は当初は自然地形の沢であったものを溝として利用している。そのため、C地点からA地点に至るまでは直線的ではなく、北側に蛇行している。東側は先述したように、北上川によって流失しているが、西側についてはどのような配置となるか、来年度に追跡を予定している。この溝は12世紀に造られ使用されていたことは、出土した遺物から明らかであるが、ある時点でその機能が終了していることも、また明らかである。それは、C地点の西側に隣接したE地点において、この溝を地山の粘土ブロックで埋めた整地層が検出されたことで、明らかである。ただし、その時期については現時点では不明である。

建物跡については、北上川沿いを除いて各地点から検出されているが、柱穴痕の径や数に違いが認められる。北東のB、D地点の柱穴は比較的細く、また数も少なく大形の建物があったとは考えにくい状況にある。このことは、この周辺に柱穴以外の土壌、あるいは井戸状遺構、溝跡、堀跡などの痕跡が殆ど認められないことから裏付けられる。一方、G地点では大形の方形、円形の柱穴痕、堀跡、井戸状遺構、土壌、溝跡などが集中し、重複して検出されている。この地域の西南側の埋文センター調査区では大規模な建物群、多数の井戸あるいは土壌が検出されており、G地点およびその西南側一帯は柳之御所跡の中でも、重要な位置を占める地域となりそうである。検出した柱穴は精査を実施していないので、図上で間取りを復原しなかったがプラン、規模、土色や他の遺構の位置関係などから判断して、最低二時期の建物の存在が考



えられる。一つの時期は長軸がほぼ南北の方向の建物からなり、他の一つはそれより、やや北側に寄る建物からなっている。個々の建物やこれらと井戸状遺構、堀跡、溝跡等の関連については、平成5年度さらに調査を実施した上で、検討することとしたい。厳密な比較は行っていないが、いくつかの堀跡・建物跡の方向は埋文センターの調査で検出されたものと同一と見受けられるものもある。

大形建物跡は、この地点の他には西側に離れたI地点で検出されている。この調査地点は民有地のため、ごく狭い範囲のトレンチを設定したのみで、かつ地形測量も実施できなかったが台状の高まりとそれを取り巻くような溝状の遺構、高低差のある地形など複雑な地形を示している地域でもある。検出された建物跡や土壌はこれらと密接な関連があるものと推定されるが、実体については次年度の調査を待つこととしたい。

## 2. 遺物について

### (i) かわらけ〔土師質土器〕

Ⅲ形とそれよりやや深い坏形の形状で、量的に他の遺物を圧倒しており、重量の概算で900kgで、80%は溝跡からの出土である。

このかわらけは成形技法から手づくねのものと、ロクロ使用のものに分けられ、それぞれ器形に大小が認められる。口径は小型のものは6～8cm、大型のもので10～16cmが主体を占めるが、量的にはそれぞれの間値が最も多い。器高は1.1cm～から4.1cmの間にすべて納まるが、1.8cm前後のものが最も多い。図示した数はロクロ使用のほうが多いが、これは絶対数が多いわけではなく、この技法のほう器壁が厚く残りが良いためである。また、大型のかわらけのうち最も口径の大きい16cm前後のものは手づくね技法によるもので、ロクロ技法によるものは殆どが15cm以下に含まれる。かわらけの層位的な確認は溝跡のみであったが、それによると、あくまでも現段階の観察であり数量的な処理は施していないが、下層ほどロクロ技法のかわらけが多く認められた。ただし、このことは精査を実施した一部の遺構の傾向に過ぎない可能性もあり、遺跡全体の傾向は埋文センター、平泉町教育委員会の調査区と比較検討の上結論を導き出すことがらであり、一調査区の一部で断定することは無理であるが、一遺構の遺物の出土傾向は示されている。

かわらけの中には、本来の飲食器以外の機能を現しているものも含まれている。一つは底部の周辺を円形状に打ち欠いたもので、(第11図17～21、12図33,34、14図79,82,83他) 欠いた部分はそのままで、磨かれてはいない。径は6cm以上10cm以下で9点を確認した。すべてロクロ使用のかわらけであるが、これはロクロかわらけの方が底部が厚く、より機能に合っていたためと推測される。ただし、その機能に関しては不明である。この他に底部を円形に穿孔したものが2点確認されている(第20図175,176)。後者は円形に打ち欠いたその中央に穿孔があるが、穿孔後円形としたのか、同一加工なのかは不明である。2点とも器内外面に付着物などは認められなかった。また、数点ではあるが口縁部周辺に煤が付着した灯明Ⅲと思われるものもある。

Ⅲ形と坏形以外には、土師質の鉢や鍋と推定される底部破片が数点と柱状高台が出土しているのみである(第12図30,31、14図76,77、14図78)

## (2) 陶磁器類

### 国産陶器

渥美・常滑・在地産の三種類に分類されるが、調査の性格上破片資料が多く、復原可能な個体は皆無である。器種は甕が圧倒的に多く、ほかに壺、摺鉢、片口鉢が少量含まれる。

全出土数は88点であり、図示した68点の産地毎の内訳は渥美38点、常滑16点、在地産および産地不明14点である。渥美が半数以上を占めているが、図示しない資料も同様の傾向を示す。柳之御所跡の国産陶器類は調査地点によって、渥美と常滑が同じ比率であったり、どちらか一方が卓越したりすることがあり、今回の出土傾向が当然のことながら全体のそれを示しているわけではない。在地産とした陶器は須恵系のもので、一部水沼窯かと思われるものも含んでいるが、現段階では窯跡は不明である。

渥美・常滑産は、甕はいわゆる大甕が殆どで格子文、井桁文および綾杉文などの押型や刻画と思われる破片（第21図189）が1点含まれている。壺は三筋文壺主体であるが数は少なく4点を確認した。摺鉢、片口鉢がそれぞれ1点ずつ出土している。この他に瓷器系陶器として台付鉢の破片が1点出土している。これらの資料の大半は12世紀後半に属する特徴を示している。在地産としたものは殆どが甕で、1点を除いてタタキ目が用いられているが、このタタキ目にはきめの細かいものと、そうでないものとの2種類が存在する。

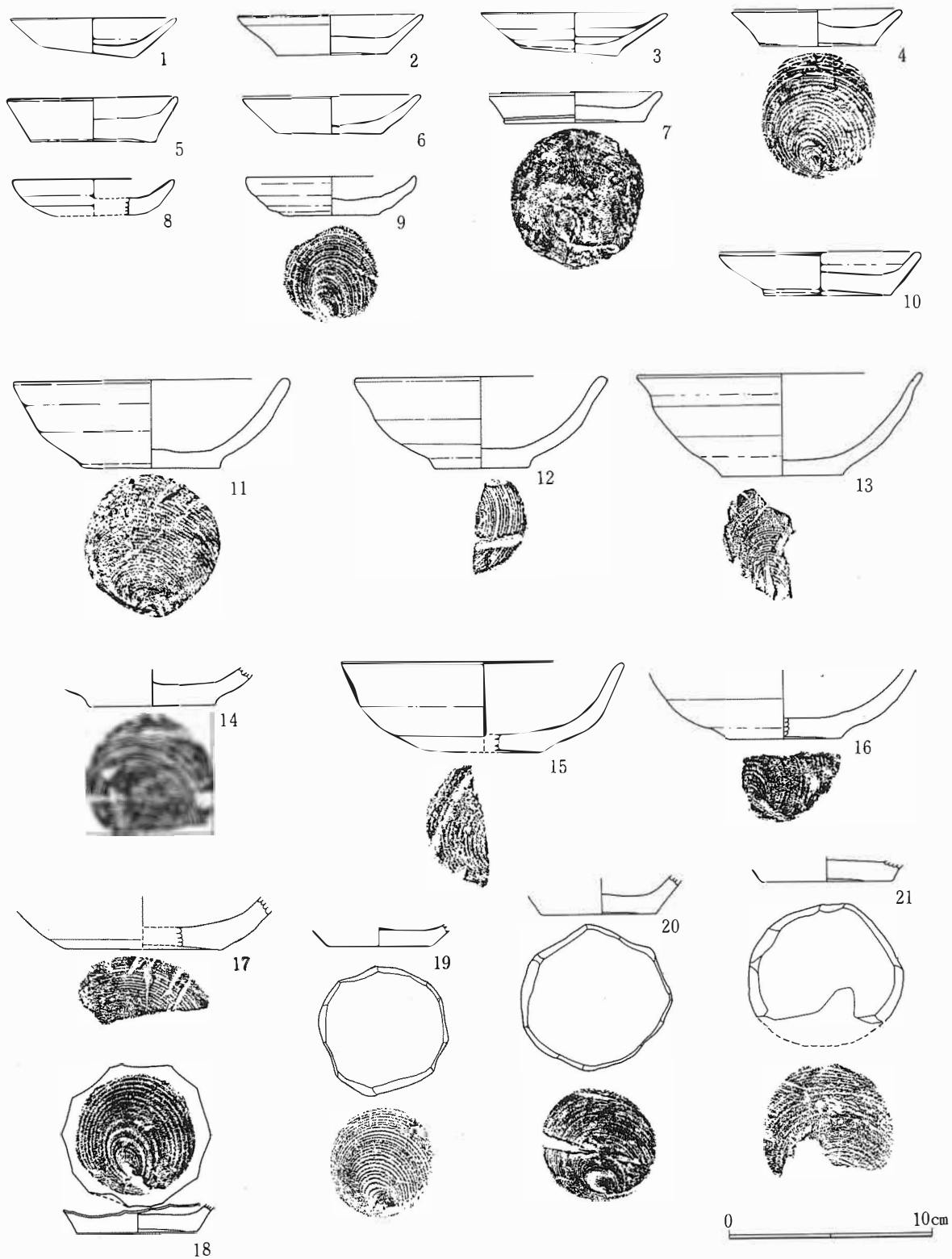
### 中国産陶磁器（写真図版20）

13点が出土しているが、内訳は青白磁、明染付と推定される1点を除いて白磁であり、12世紀を含む存続年代を有している。器種は壺類が多くこれに碗あるいは皿が数点加わっている。壺には四耳壺、水注が1点ずつ含まれており、柳之御所跡の中国産陶磁器の出土傾向を良く表している。壺、碗ともⅡ系あるいはⅡ系の範疇に含まれるものと推定される。

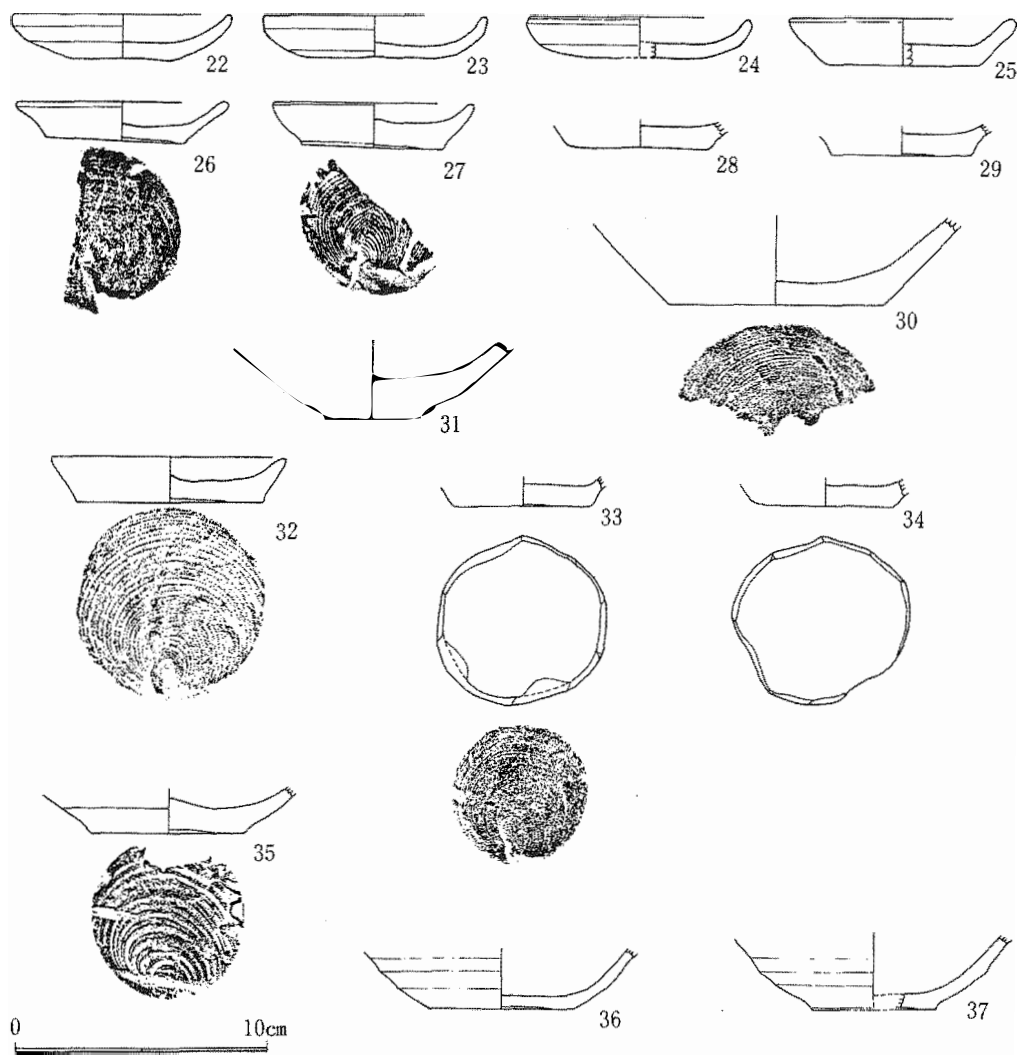
(3) その他(瓦-第19図150~156、木製品-写真図版3, 8)

瓦は7点出土している。内訳は軒平瓦、丸瓦、平瓦ですべて破片資料である。軒平瓦には陽刻の三巴文が見られる。器面には布目と縄目の叩き痕の両者が認められる。これらの瓦は個体そのものから年代を計るデータを持ち得ていないが、出土の状況は他の遺物と同様、12世紀代であることを示している。出土地点は遺構の集中するグリットもしくは溝からである。

木製品は主として溝から出土しており、建築部材と推定されるものが殆どで、1点杖状の製品がある。

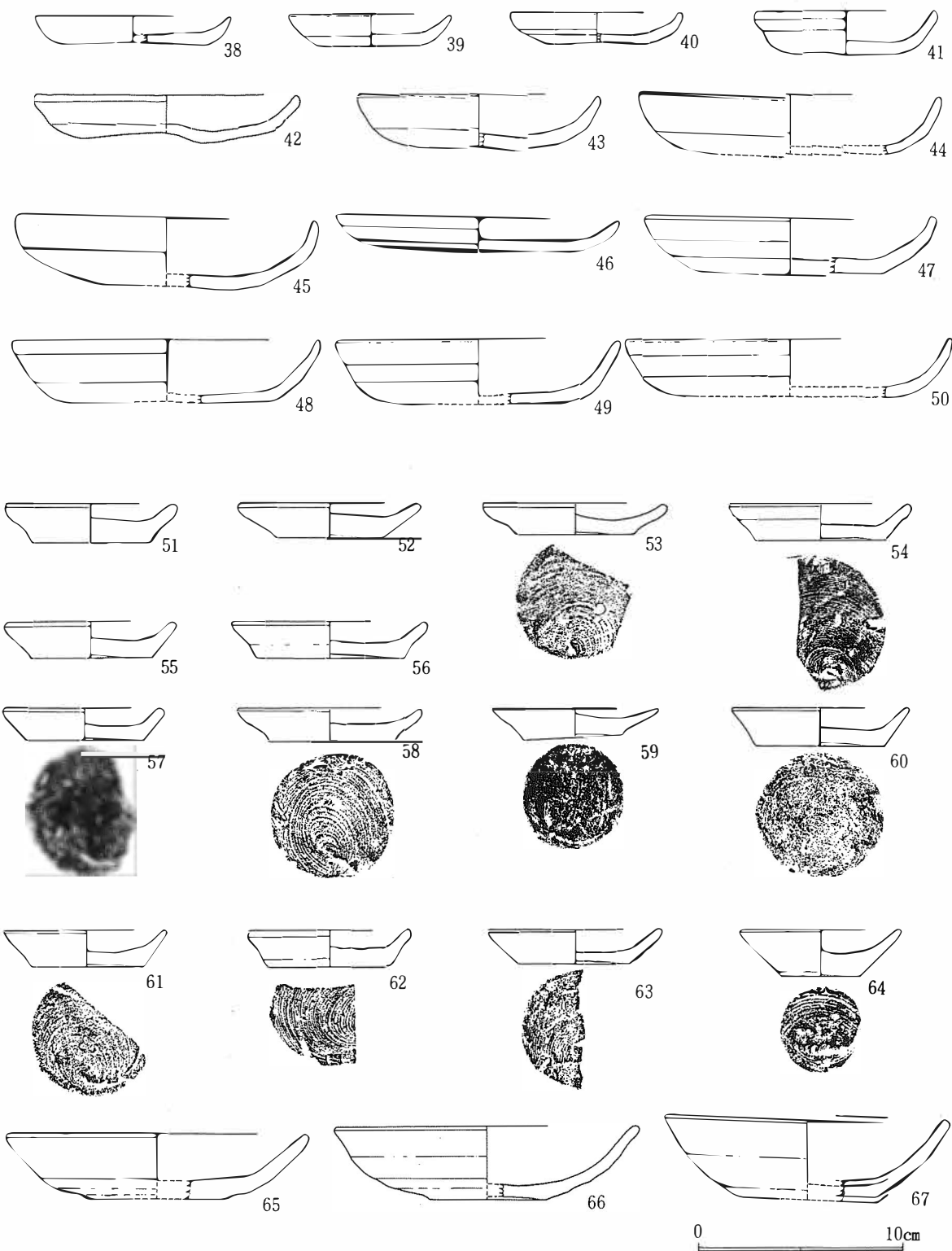


第11図 C地点溝出土かわらけ(1)

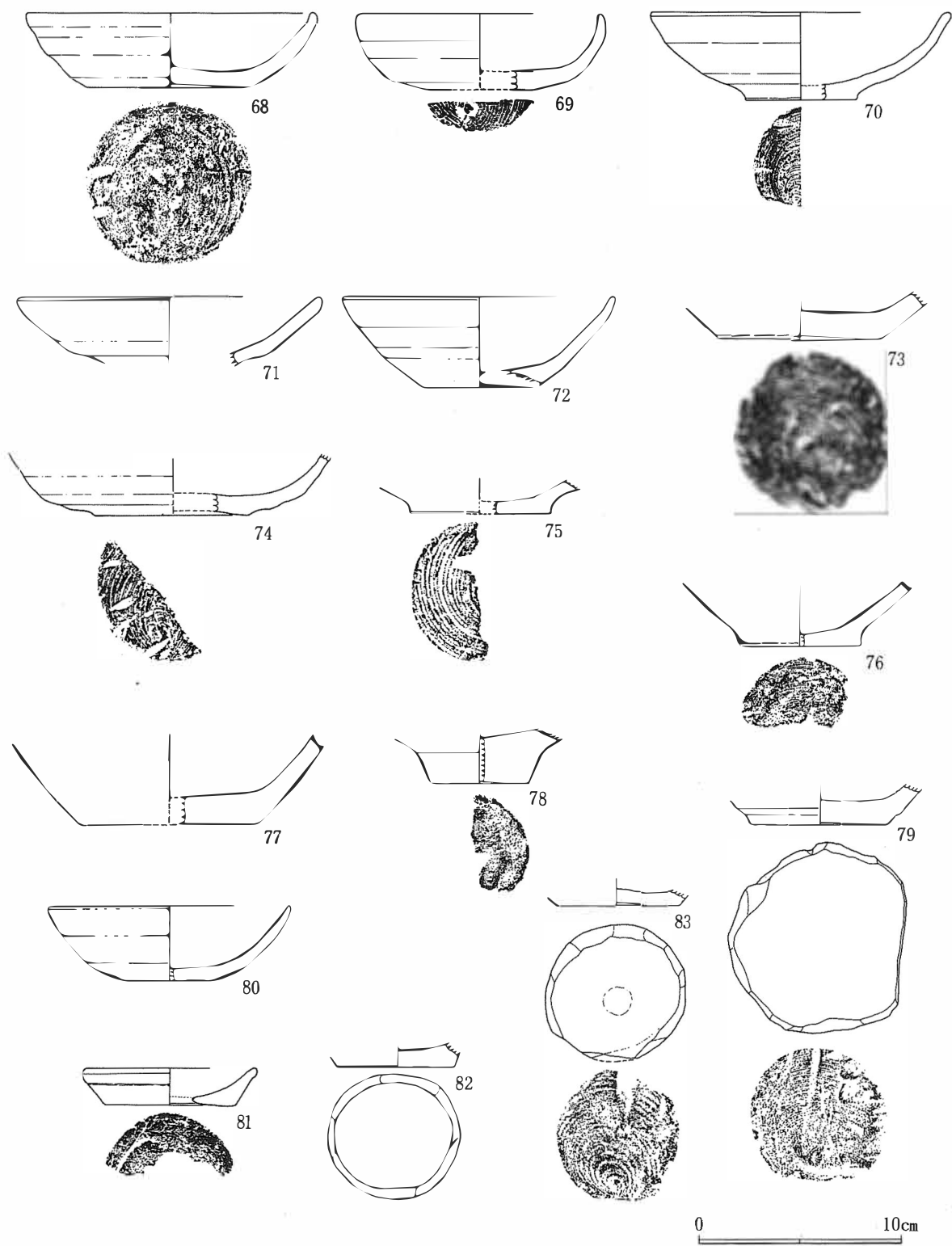


(37 : 土師器)

第12図 C地点溝出土かわらけ(2)

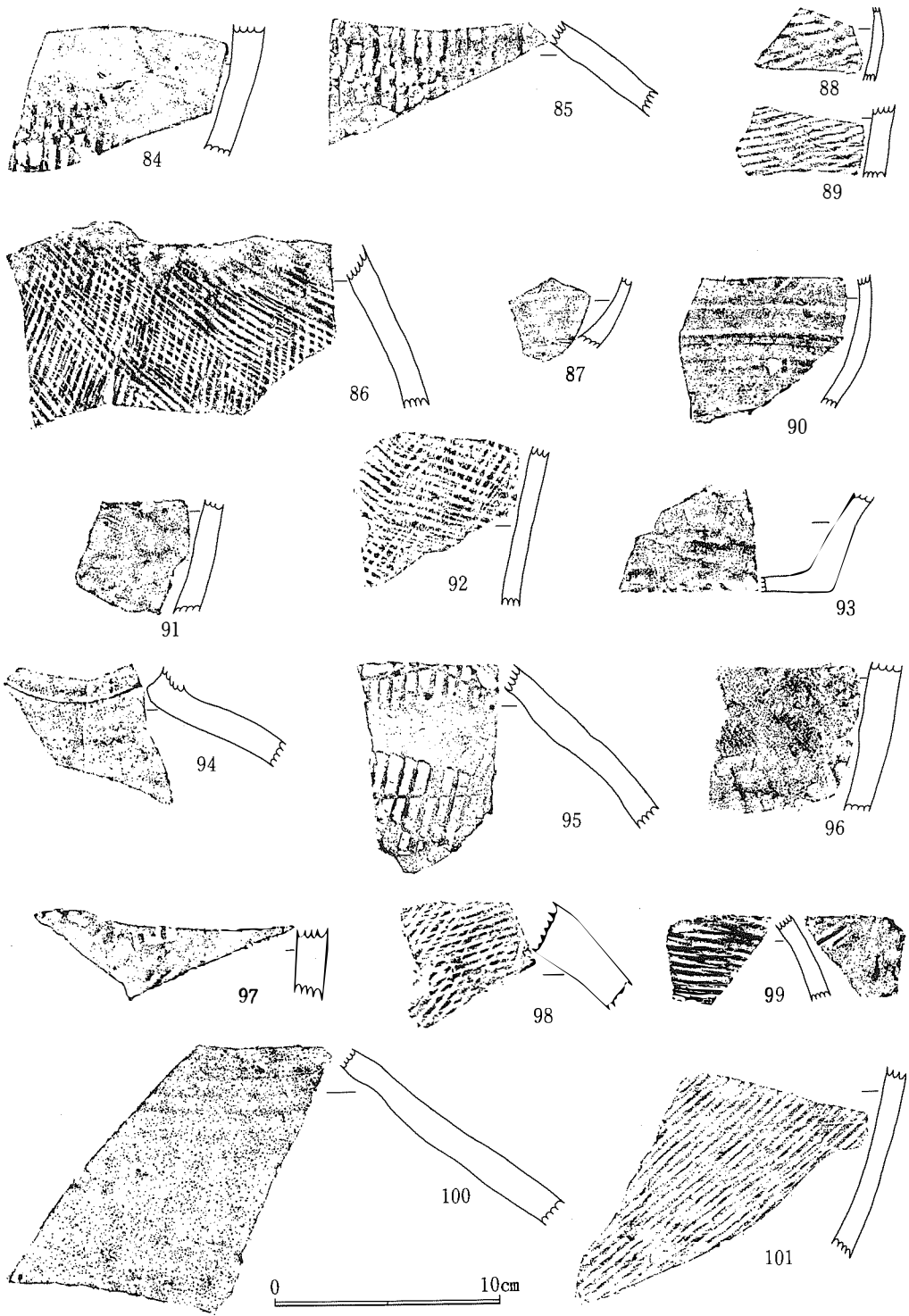


第13図 C地点溝出土かわらけ(3)

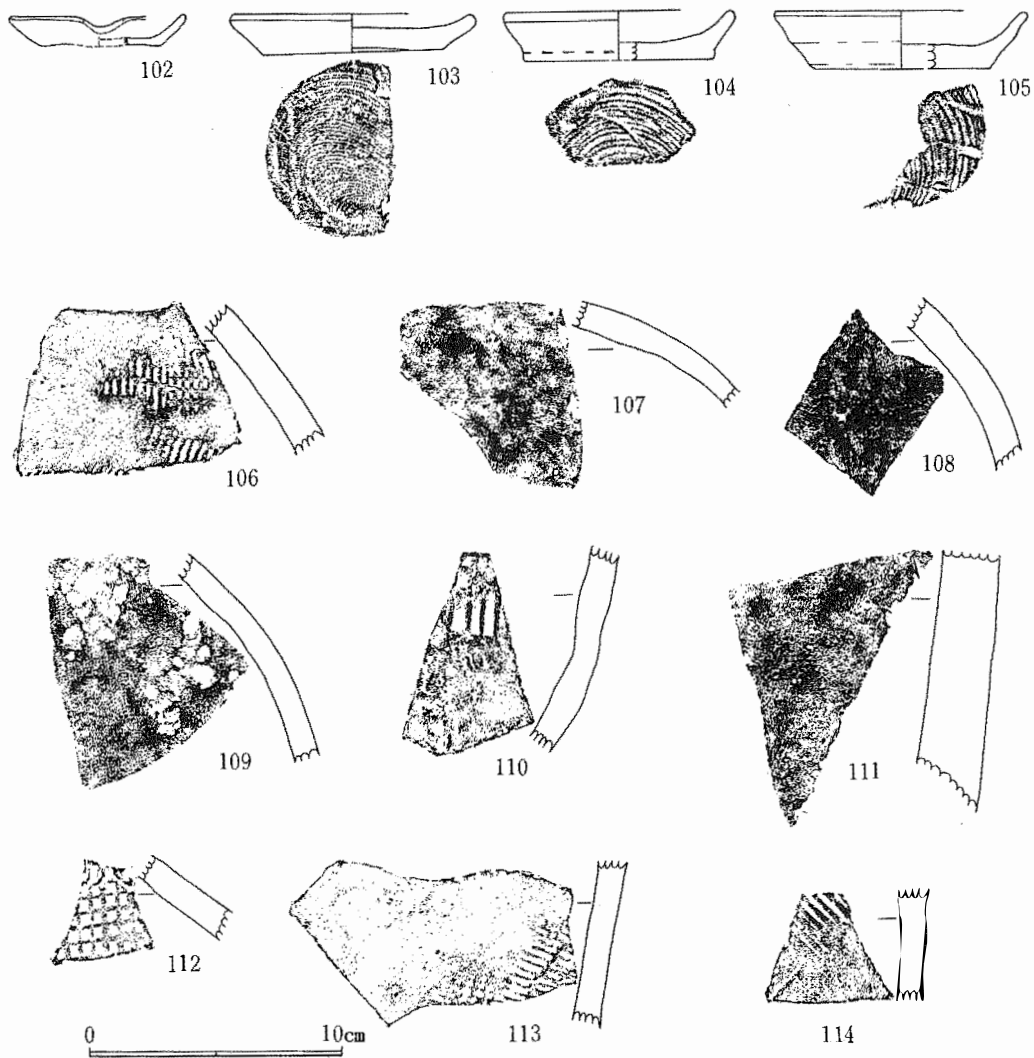


第14図 C地点溝出土かわらけ(4)

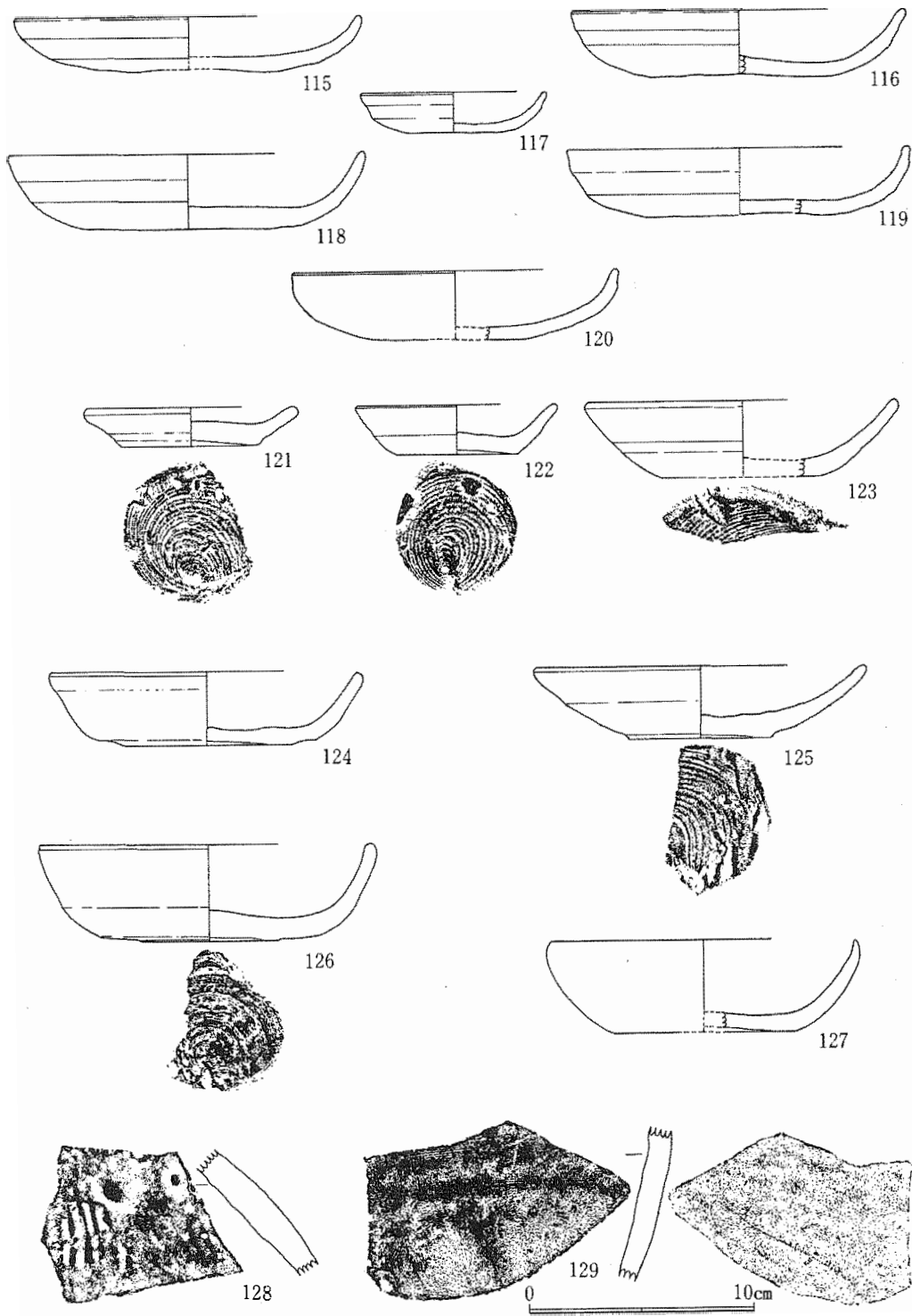




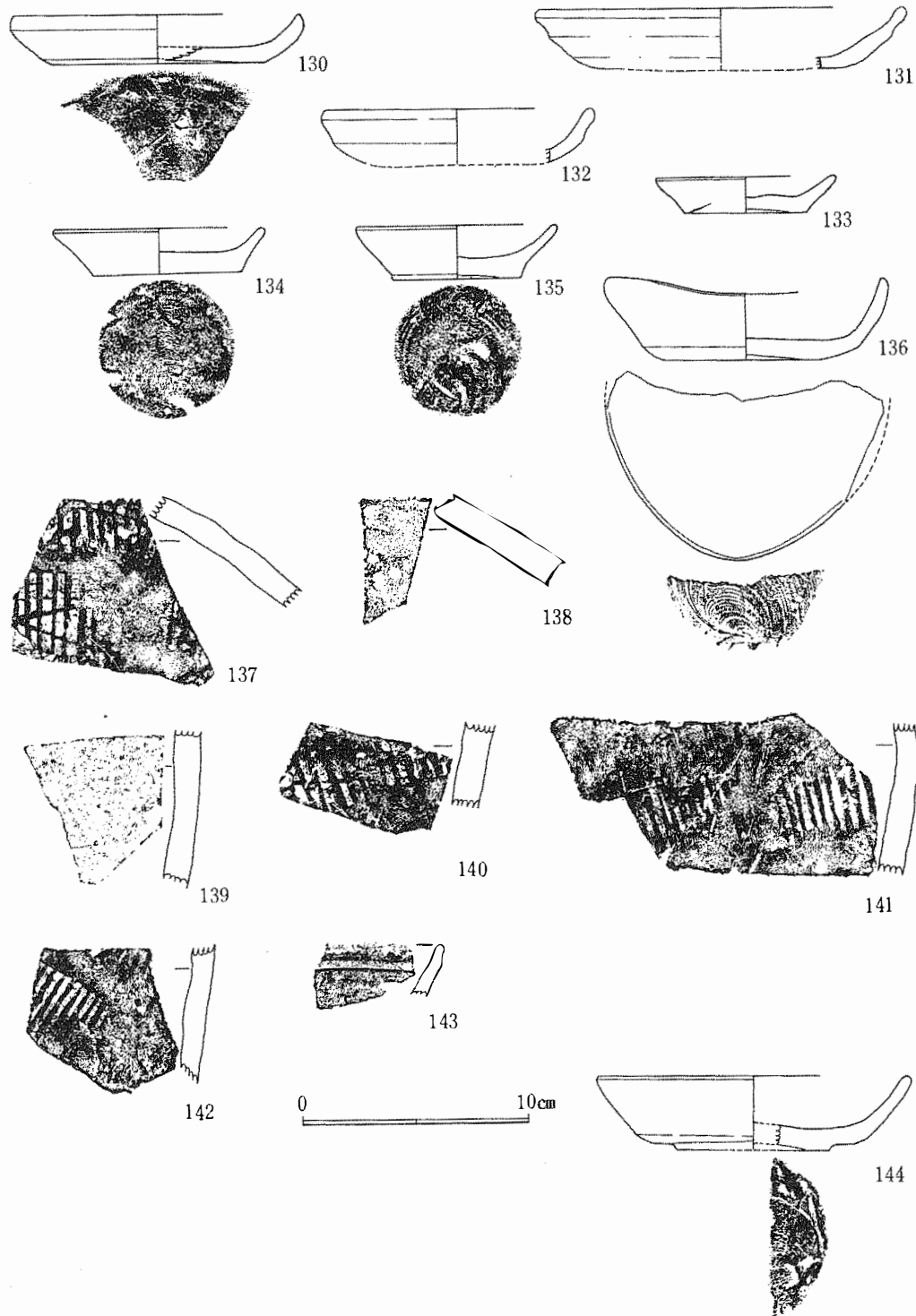
第15图 C地点沟出土国産陶器



第16图 A地点东侧沟出土遗物

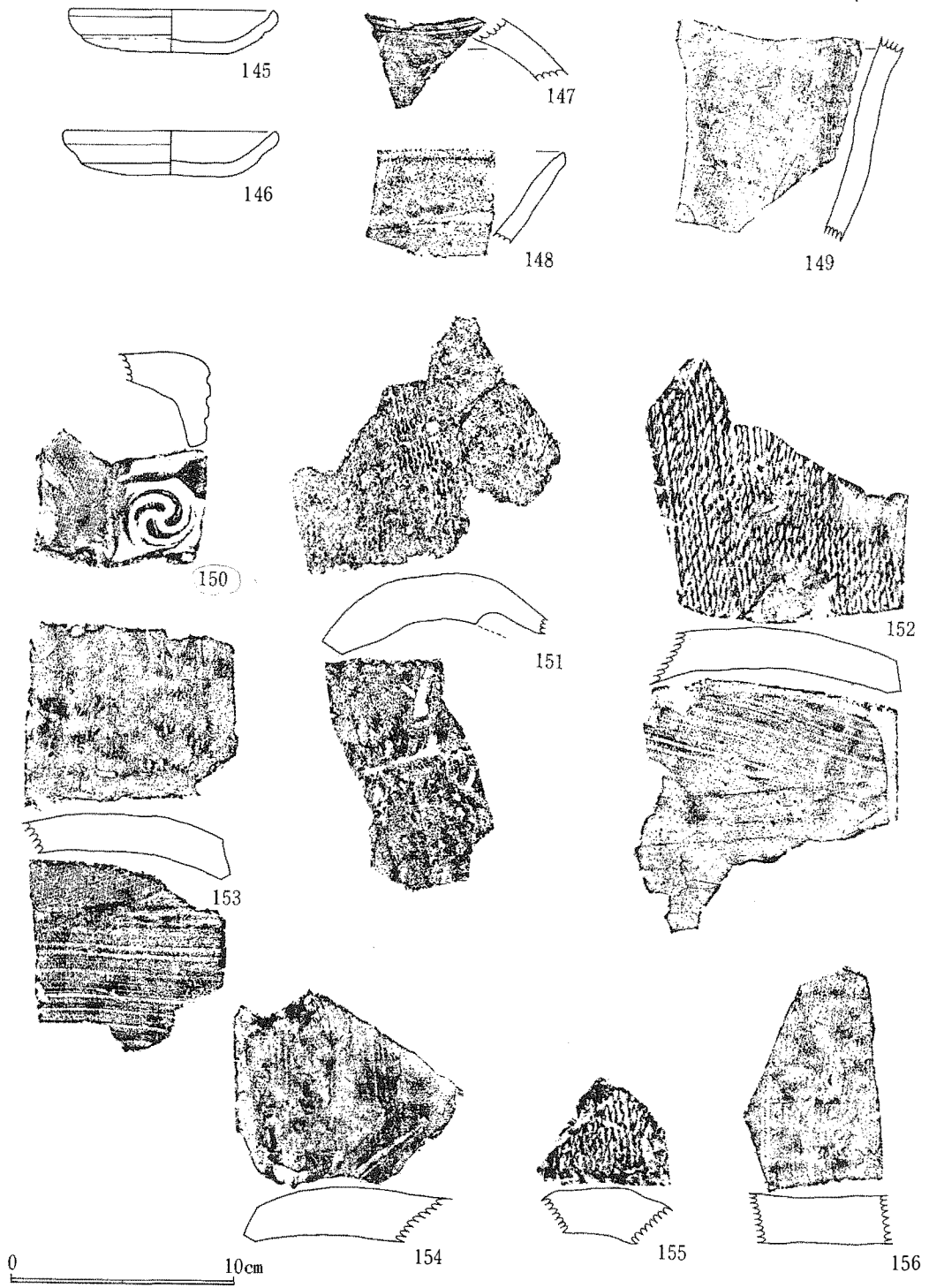


第17图 G地点S D 8 沟出土遗物

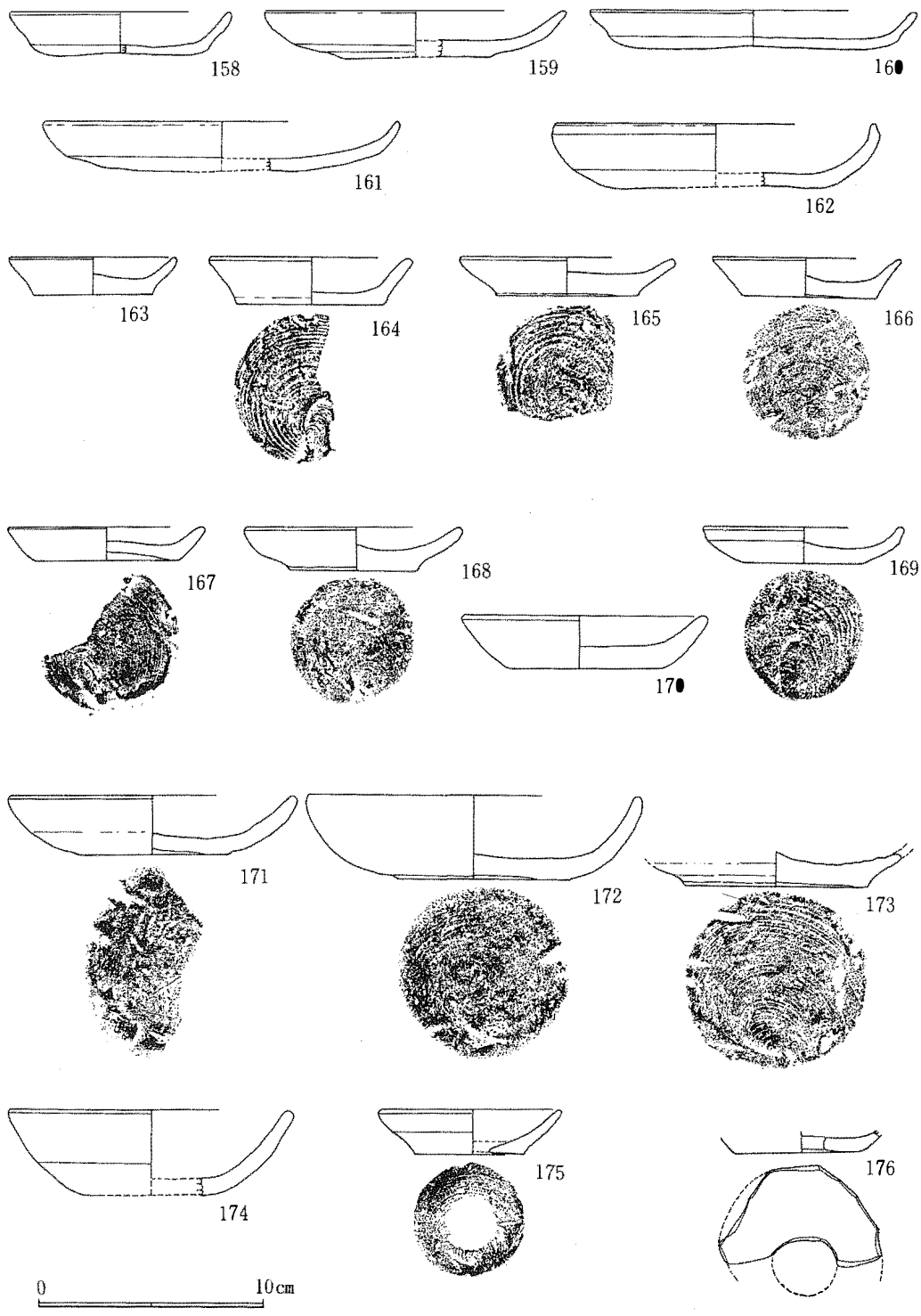


(130~135, 137~143 : SD 4、136 : SD5、144 : SE 2)

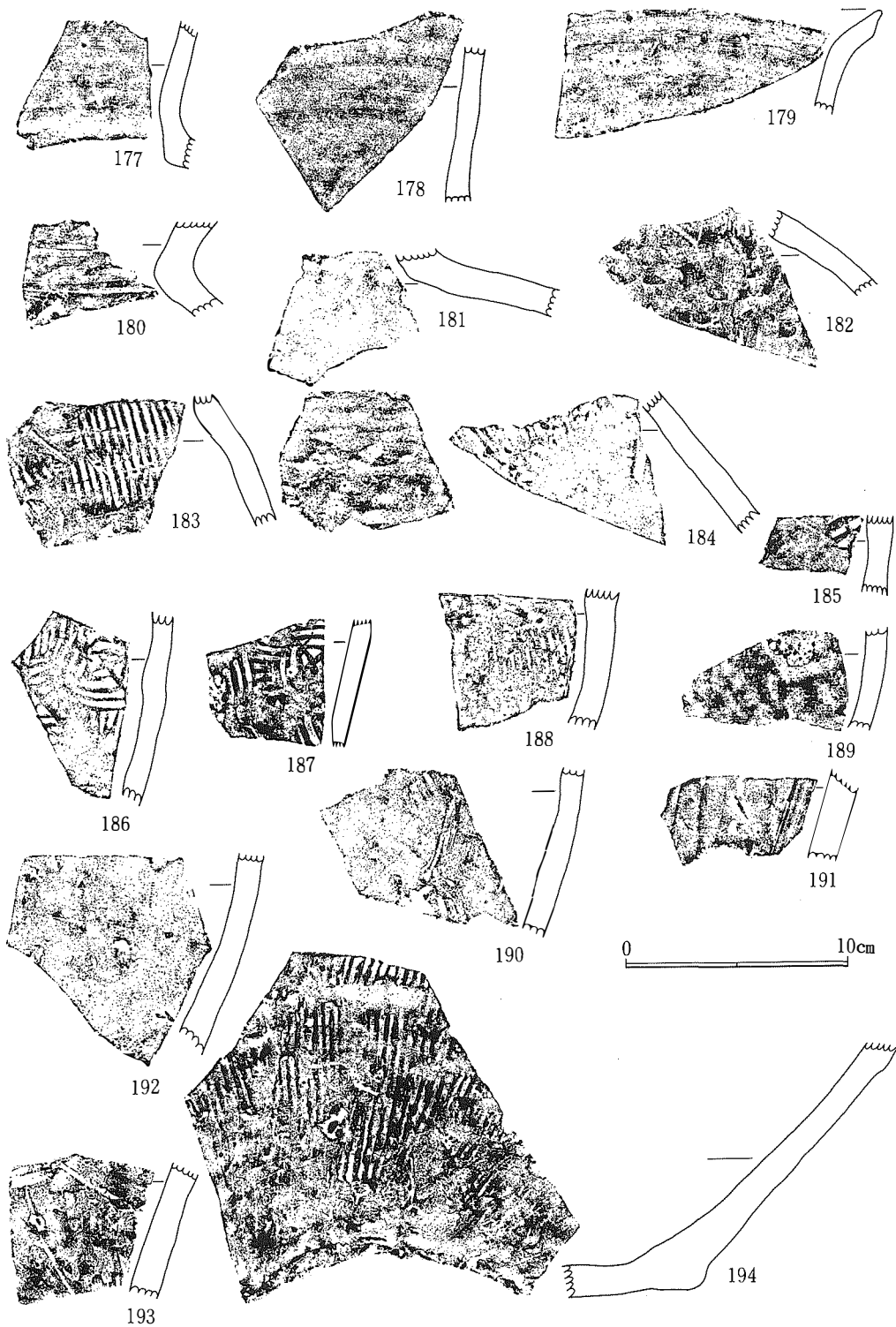
第18图 G地点出土遗物



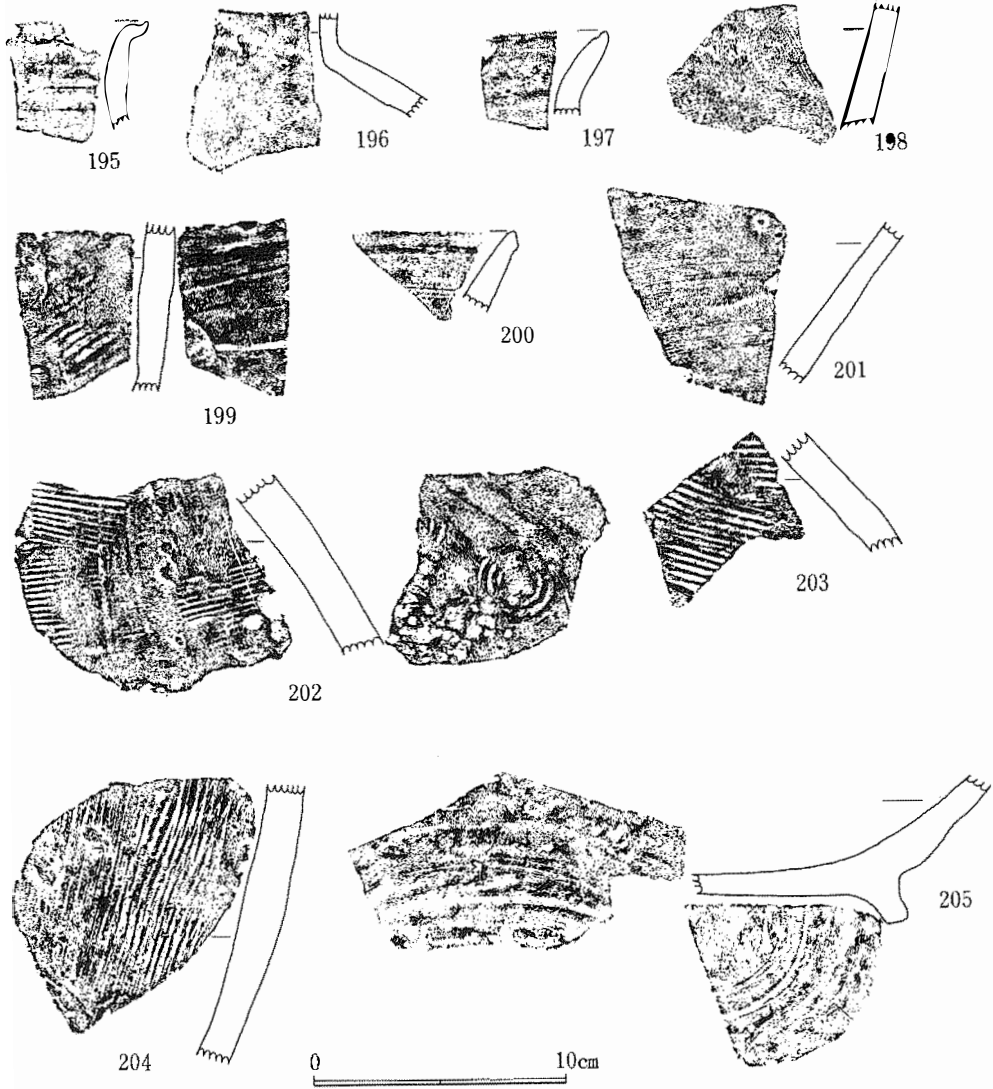
第19図 G地点SD9出土遺物及び調査区内出土瓦類



第20図 G地点遺構外出土遺物（かわらけ）



第21図 G地点遺構外出土遺物（国産陶器Ⅰ）



第22图 G地点遺構外出土遺物（国産陶器 2）



表1 かわらけ(1)

番号	挿図 番号	図版 番号	地点 遺構名	層 位	種 類	口 径	底 径	器 高	完 形 度	備 考
1	11	11	C地点溝	褐色グライ層	ロクロ	8.2	4.7	2.0	完形	ロクロ痕摩滅
2	〃	11	C地点溝	褐色グライ層	〃	8.2	5.5	2.0	完形	ロクロ痕摩滅
3	〃	11	C地点溝	褐色グライ層	〃	9.2	5.0	2.0	完形	ロクロ痕摩滅
4	〃	11	C地点溝	褐色グライ層	〃	8.4	5.6	1.8	口縁1/2欠	回転糸切り、灯明皿?
5	〃	11	C地点溝	褐色グライ層	〃	8.4	6.2	2.1	完成	ロクロ痕摩滅
6	〃	11	C地点溝	褐色グライ層	〃	8.8	5.2	1.9	完形	ロクロ痕摩滅
7	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃	8.6	6.9	1.5	■縁一部欠損	糸切りの糸痕明確
8	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃	(8.0)	(4.0)	1.8		回転糸切り
9	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃	8.4	5.0	1.9		回転糸切り
10	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃	10.0	6.3	2.1	口縁2/3欠損	回転糸切り
11	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃	13.6	6.8	4.4	口縁胴部1/4欠損	回転糸切り
12	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃	(12.4)	(5.0)	4.4		回転糸切り
13	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃	(4.0)	(6.0)	5.0		回転糸切り
14	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃		6.2			回転糸切り
15	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃	(14.0)	(6.0)	4.5		回転糸切り
16	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃		(6.0)			回転糸切り
17	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃		(8.0)			回転糸切り
18	〃	11	C地点溝	褐色グライ層	〃		6.0	1.3+α	口辺部打ち欠き	
19	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃		5.4	1.1		
20	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃		5.7			回転糸切り
21	〃		C地点溝	褐色グライ層	〃		6.6			回転糸切り
22	12		C地点溝	砂層	手捏	8.8	4.0	1.8	1/3欠	
23	〃		C地点溝	〃	手捏	(9.0)	(5.0)	1.7	1/3欠	二段ナデ
24	〃		C地点溝	〃	手捏	(9.0)		1.6	1/2欠	
25	〃		C地点溝	〃	ロクロ	(9.0)	(6.0)	1.9		ロクロ摩滅
26	〃	11	C地点溝	〃	〃	(8.4)	(5.8)	1.8	口縁1/2欠	回転糸切り
27	〃		C地点溝	〃	〃	(8.0)	(5.8)	1.9		回転糸切り
28	〃		C地点溝	〃	〃		5.8			
29	〃		C地点溝	〃	〃		5.6			回転糸切り
30	〃		C地点溝	〃	〃		(8.6)			回転糸切り
31	〃		C地点溝	〃	〃		4.0			
32	〃	11	C地点溝	1層	〃	9.2	7.5	1.8	口縁2/3欠	回転糸切り
33	〃		C地点溝	砂層	〃		5.6			回転糸切り
34	〃		C地点溝	〃	〃		5.8			
35	〃		C地点溝	24層	〃		6.4			
36	〃		C地点溝	整地層下火山灰混層	〃		(5.8)			ロクロの底ナデ
37	〃		C地点溝	整地層下火山灰混層	土師器		(5.0)	33.0+α		回転糸切り
38	13		C地点溝	砂層の下	手捏	(9.8)	(7.6)	1.4		
39	〃		C地点溝	砂層の下	〃	(8.0)	(5.0)	1.6		
40	〃		C地点溝	砂層の下	〃	(8.4)	(5.0)	2.1	一段2/5残	
41	〃		C地点溝	砂層の下	〃	(9.0)	4.7	2.2	2/3欠損	
42	〃		C地点溝	砂層の下	〃	(13.0)	(8.0)	2.4	1/2残	いびつ
43	〃		C地点溝	砂層	〃	(12.0)	(5.0)	2.7	1段1/3残	
44	〃		C地点溝	砂層の下	〃	(14.8)		2.9	1/4残	
45	〃		C地点溝	砂層の下	〃	(14.8)		3.4	1/3残	

C地点溝:褐色グライ層は36~39・47・48層、砂層は27~30層を中心とした砂質土層を、砂層下は41・42層を、整地層は43層を指す。

表2 かわらけ(2)

番号	挿図 番号	図版 番号	地点・遺構名	層位	種類	口径	底径	器高	完形度	備考
46	13		C地点溝	砂層の下	手握	(14.0)	(8.0)	1.8	2/3次	2段ナデ
47	"		C地点溝	砂層の下層	"	(14.4)		2.8		
48	"		C地点溝	砂層下層	"	(15.2)		3.1		2段
49	"		C地点溝	砂層の下層	"	(14.0)	(9.0)	3.2		
50	"		C地点溝	砂層の下	"	(16.0)		2.8	口縁1/3	1/4残
51	"		C地点溝	砂層の下	ロクロ	(8.4)	(7.0)	1.9	口縁3/4	回転糸切り
52	"		C地点溝	砂層の下層	"	(9.0)	(5.4)	1.7		ロクロ摩滅
53	"		C地点溝	砂層の下層	"	(9.0)	(5.8)	1.5		回転糸切り
54	"		C地点溝	砂層の下層	"	(9.0)	6.4	1.8	口縁2/3次	回転糸切り
55	"		C地点溝	砂層の下層	"	(8.4)	(6.0)	1.8	口縁3/4次	回転糸切り
56	"		C地点溝	砂層の下層	"	(9.6)	(7.0)	1.8	口縁3/4次	回転糸切り
57	"	11	C地点溝	砂層の下	"	(8.0)	(5.6)	1.6	口縁1/2次	回転糸切り
58	"		C地点溝	砂層の下層	"	(9.0)	(6.2)	1.7	口縁3/4次	回転糸切り
59	"	11	C地点溝	砂層下層	"	(8.2)	(4.8)	1.4	口縁1/2次	回転糸切り
60	"		C地点溝	砂層の下	"	8.8	6.4	1.9	口縁1/2次	
61	"		C地点溝	砂層の下	"	7.1	5.8	1.8	口縁1/2次	回転糸切り
62	"		C地点溝	砂層の下層	"	(8.0)	(6.0)	1.8		回転糸切り
63	"	11	C地点溝	砂層の下	"	(7.6)	(5.7)	1.7	1/2次	回転糸切り
64	"		C地点溝	砂層の下層	"	(8.0)	(4.0)	2.3	口縁半次 (一部欠)	回転糸切り
65	"		C地点溝	砂層の下層	"	(15.0)	(7.0)	3.2	口縁3/4次	回転糸切り
66	"		C地点溝	砂層の下	"	(15.0)	(6.0)	3.5		回転糸切り
67	"		C地点溝	砂層の下層	"	(14.0)	(7.0)	3.9	口縁3/4次	ロクロ摩滅
68	14		67-84G	溝砂層の下	"	14.4	8.4	3.7	口縁部1/2次	回転糸切り
69	"		C地点溝	砂層の下	"	(12.8)	(5.6)	3.8		回転糸切り
70	"		C地点溝	砂層の下	"	(14.8)	(5.4)	4.3	2/5次	
71	"		C地点溝	砂層の下層	"	(15.0)				
72	"		C地点溝	砂層の下層	"		(8.0)			回転糸切り
73	"		C地点溝	砂層の下	"		8.0	(1.7)		鉢か?かわらけにして は厚く大きい
74	"		C地点溝	砂層の下層	"		(7.6)			回転糸切り
75	"		C地点溝	砂層の下層	"	(14.0)	(7.0)	3.9	口縁3/4次	ロクロ摩滅
76	"		C地点溝	砂層の下	"		(6.0)	3.2		回転糸切り
77	"		C地点溝	砂層の下	"		(9.0)			回転糸切り
78	"		C地点溝	砂層の下	"		(5.0)			竪状高台
79	"		C地点溝	砂層の下層	"		(7.0)	2.1		回転糸切り
80	"		C地点溝	砂層の下層	"	(12.0)	(4.6)	3.7		回転糸切り
81	"		C地点溝	砂層の下	"	8.4	6.4	1.8	1/2次	底部穿孔
82	"		C地点溝	砂層	"	(12.0)	(5.0)	2.7		ロクロ摩滅・周辺擦って いる
83	"		C地点溝	砂層の下	"		6.0			回転糸切り
102	106		A地点 東側溝	溝上層	手握		(7.0)			
103	"	11	A地点 "	溝下位	ロクロ	(9.8)	(7.0)	1.6	口縁1/2次	回転糸切り
104	"		A地点 "	溝下層	"	(9.2)	(7.6)	2.0	口縁2/3次	回転糸切り
105	"		A地点 "	溝下層 (グライ層直上)	"	(10.0)	(7.0)	2.3		回転糸切り
115	17		37-S D8	埋土中層	手握	(15.6)	(6.0)	2.5	3/4次	
116	"		"	"	"	(16.0)	(7.0)	3.4	2/3次	
117	"		"	埋土下層	"	(8.2)		1.8		
118	"		"	埋土中層	"	(16.0)	(7.0)	3.4	2/3次	
119	"		"	"	"	(15.4)		3.0		
120	"		"	"	"	(14.6)		3.0	1/3残	

表3 かわらけ(3)

番号	挿図 番号	図版 番号	地点・遺構名	層位	種類	口径	底径	器高	完形度	備考
121	17		S D 8	埋土中層	口クロ		6.2			回転糸切り
122	"	"	"	"	"	(9.0)	(5.5)	2.2	■縁3/4欠	
123	"	"	"	"	"	(14.0)	(7.0)	3.3	口縁3/4欠	
124	"	"	"	埋土下層	"	(14.0)	7.6	3.3		口クロ摩滅
125	"		37 S D 4	埋土	"	(15.0)	(6.4)	3.3	口縁3/4欠	回転糸切り
126	"		37 S D 8	埋土中層	"	(15.0)	(6.0)	4.3	口縁5/6欠	回転糸切り
127	"	"	"	"	"	(14.0)	(8.0)	4.1	半全欠	
130	18		37 S D 4	埋土	手捏	(13.0)	(9.0)	2.2	口縁2/3欠	
131	"		37 S D 4	"	口クロ	(16.4)		2.7		
132	"		37 S D 4	"	"	(12.0)		2.4		
133	"		37 S D 4	"	"	(8.0)	(5.4)	1.6		
134	"		37 S D 4	"	"	9.4	6.6	2.0		回転糸切り
135	"	11	37 S D 4	"	"	(9.0)	(5.8)	2.2	口縁2/3欠	回転糸切り
136	"	12	37 S D 5	"	"	12.7	7.0	3.7		
144	"		37 S E 2	埋土上層	"	(14.0)	(5.6)	3.4	口縁1/2欠	回転糸切り
145	19	12	37 S D 4	埋土	手捏	10.0	4.8	2.1	完形	
146	"		37 S D 4	"	"	9.4	5.0	2.1	完形	
157	10		I地点 T6	1層	口クロ	15.0	8.5	3.6	口縁1/3欠	回転糸切り
158	20		G地点	1層	手捏	10.0	6.0	2.0		
159	"	"	"	1層	"	(14.0)	(7.0)	2.2	半全欠	
160	"	"	"	1層	"	(14.6)	(11.0)	1.7	1段1/2残	
161	"	"	"	1層	"	(16.0)		2.2	1/4残	
162	"	"	"	1層	"	(14.6)		2.8	1/3残	
163	"	"	"	1層	口クロ	7.6	5.4	1.7		口クロ摩滅
164	"	12	"	1層	"	(9.0)	(6.8)	2.1	口縁1/2欠	回転糸切り
165	"	"	"	1層	"	(9.6)	(6.4)	1.8	口縁2/3欠	回転糸切り
166	"	12	"	1層	"	(8.4)	(5.9)	1.8	口縁1/2欠	回転糸切り
167	"	12	"	1層	"	(8.8)	(6.6)	1.5	口縁2/3欠	回転糸切り
168	"	12	"	1層	"	(9.7)	(5.7)	2.0	口縁1/2欠	回転糸切り
169	"	12	"	1層	"	8.5	5.0	1.8	口縁1/2欠	回転糸切り
170	"	12	I地点	1層	"	11.0	6.7	2.4	口縁のみ1/3欠	口クロの上がいへら、灯明皿?
171	"	12	G地点	1層	"	(13.0)	(7.0)	2.6	口縁2/3欠	
172	"	12	"	1層	"	(15.0)	(8.0)	3.7	口縁2/3欠	回転糸切り
173	"	12	"	1層	"	-	8.4	1.5	口縁再調整	回転糸切り
174	"	"	"	1層	"	(12.6)		3.8		
175	"	"	"	1層	"	8.1	4.8	2.0	口縁1/2欠	底部穿孔
176	"	12	"	1層	"		6.0			"

表4 国産陶器

番号	挿図 番号	図版 番号	地点・遺構名	種類	備考	番号	挿図 番号	図版 番号	地点・遺構名	種類	備考
84	15	14	C地点溝 褐色グライ層	渥美	甕	149	19	16	37SD4 溝埋土	渥美	カメ・ササヲ杖 工具、タラナデ
85	"	"	C地点溝 砂層	渥美	甕	150	"	19	" 1層	軒半瓦	三巴文陽刻
86	"	"	C地点溝 砂層	須恵器系		151	"	"	G地点 1層	丸瓦	
87	"	"	C地点溝 砂層	渥美		152	"	"	37SD4 1層	平瓦	
88	"	"	C地点溝 砂層	須恵器	在地系	153	"	"	C地点溝 砂層の下	平瓦	
89	"	"	C地点溝 砂層	須恵器	在地系	154	"	"	C地点溝 褐色グライ層	平瓦	
90	"	"	C地点溝 砂層	須恵器	在地系	155	"	"	37SD8 溝砂層の下	平瓦	
91	"	"	C地点溝 砂層	渥美	甕	156	"	"	C地点溝 褐色グライ層	平瓦	
92	"	"	C地点溝 砂層	須恵器		177	21	17	37SD4 1層	渥美	甕
93	"	"	C地点溝 砂層	常滑	三筋壺 渥美	178	"	"	37SD1 1層	渥美	広口びん
94	"	"	C地点溝 砂層の下	常滑		179	"	"	G地点	渥美	カメ
95	"	"	C地点溝 砂層の下	渥美	甕	180	"	"	"	渥美	甕
96	"	"	C地点溝 砂層の下	渥美	甕	181	"	"	1層	渥美	甕
97	"	"	C地点溝 砂層の下	常滑		182	"	"	37SD10 1層	渥美	甕
98	"	"	C地点溝 砂層の下	須恵器	在地系	183	"	"	G地点 1層	渥美	甕
99	"	"	C地点溝 砂層の下	須恵器	在地系	184	"	"	37SD10 1層	渥美	
100	"	15	C地点溝 砂層の下	在地系		185	"	"	37SD4 1層	渥美	甕
101	"	"	C地点溝 砂層の下	須恵器	在地系	186	"	"	37SD1 1層	渥美	カメ、あや杉 三文押印
106	16	"	A地点 溝上層	常滑		187	"	"	37SD4 1層	渥美	カメ、あや杉 押印
107	"	"	A地点 溝中層	常滑		188	"	"	G地点 1層	渥美	甕
108	"	"	A地点 東院壁土下層(グライ層直上)	渥美	甕	189	"	"	D地点 1層	渥美	刻画?
109	"	"	A地点 溝上層	渥美	甕	190	"	"	37SD10 1層	渥美	甕
110	"	"	A地点 溝上層	渥美		191	"	18	" 1層	渥美	甕
111	"	"	A地点 溝上層	須恵器系		192	"	"	" 1層	渥美	甕
112	"	"	A地点 東院壁土下層(グライ層直上)	渥美	甕	193	"	"	" 1層	渥美	甕
113	"	"	A地点 77-100付近最下層	常滑		194	"	19	H地点 1層	渥美	カメ
114	"	"	A地点76-100付近 溝中下層	渥美	甕	195	22	18	37SD1 1層	常滑	三筋壺、カメ
128	17	16	37SD8 溝砂層の下	渥美	甕	196	"	"	G地点 1層	常滑	壺
129	"	"	" 溝砂層の下	須恵器系 か須恵器 山部か?		197	"	"	" 1層	常滑	カメ
137	18	"	62-86G SD4	渥美	甕	198	"	"	" 1層	常滑	
138	"	"	62-86G SD4	渥美	甕	199	"	"	" 1層	渥美	甕
139	"	"	62-86G SD4	渥美	甕	200	"	"	" 1層	常滑	片口鉢
140	"	"	62-86G SD4	渥美	甕	201	"	"	37SD4 1層	常滑	
141	"	"	37SD8・SD4 1層	常滑	接合	202	"	"	37SD1 1層	須恵器系	産地不明
142	"	"	SD4	常滑		203	"	"	G地点 1層	須恵器系	産地不明
143	"	"	SD4	常滑		204	"	"	" 1層	須恵器系	産地不明
147	19	"	" 溝埋土	渥美		205	"	19	"	瓷器系	
148	"	"	" 溝埋土	常滑	スリ鉢						

表5 中国産陶磁器

番号	挿図 番号	図版 番号	地点 遺構名	種類	器種	部位	釉 詞	時代(C)	備 考
1		20	37S D10	1層 白	壺				Ⅱ系
2		"	37S D9	1層 白	壺(タテ線)				Ⅱ×Ⅲ?
3		"	G地点	1層 白	壺				Ⅱ?系
4		"	37S D4	1層 白	壺				Ⅱ系
5		"	D地点	1層 白	水注				Ⅲ系
6		"	C地点溝	砂層の下	白	碗			Ⅱ 1
7		"	62-90G 37S D4	1層 青白	碗×皿				
8		"	A地点	1層					
9		"	C地点溝	砂層の下	明染付?				

## おわりに

平成4年度の範囲確認調査の概要および結果は以上のとおりである。今年度の調査は埋文センター調査区の北側、北上川沿いの遺構の分布状況の把握を調査主眼としたため、前述したように個々の遺構の精査は殆ど実施しなかった。このため、図示した遺物には偏りがあり、確実な年代観を付与する根拠にも欠けている。これについては、次年度の調査である程度補うこととしたい。今年度の調査結果をまとめると以下のとおりである。

- 柳之御所跡は北上川の崖線まで続いており、一部東南部分は北上川の流水によって削平されている。
- 遺構は調査区全体に拡がっているが、埋文センター調査区即ち南側に密度が濃く、かつ規模の大きな遺構が認められ、川沿い近くなるにつれて密度が薄く、かつ規模も小さくなる傾向が認められる。
- ただし、川寄りの北西部の複雑な地形を示す地点では、大型の遺構の存在が推定される。
- 遺物は概ね12世紀後半の年代観を示しているが、遺構には最低でも2時期の重複関係がみとめられる。
- 川寄りの遺構の在り方からして、本来の柳之御所は現在の北上川まで拡がっており、川に侵食されている。
- 北上川の擁壁工事により、遺跡の川寄り部分の一部は削平されている。





(シートから川寄りが調査区)



第1図版：調査区全景





第2 図版：A地点東側溝断面



全体断面



木製品出土状況

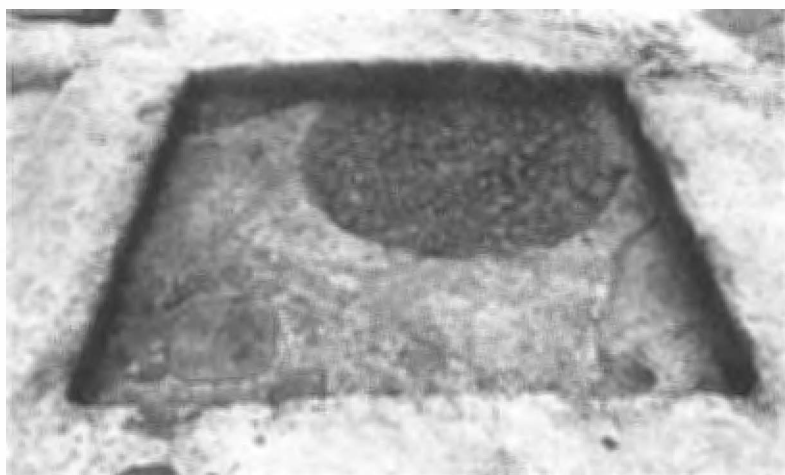


水路断面

第3図版：C地点溝



全景



37-SE1 井戸検出状況



柱穴検出状況

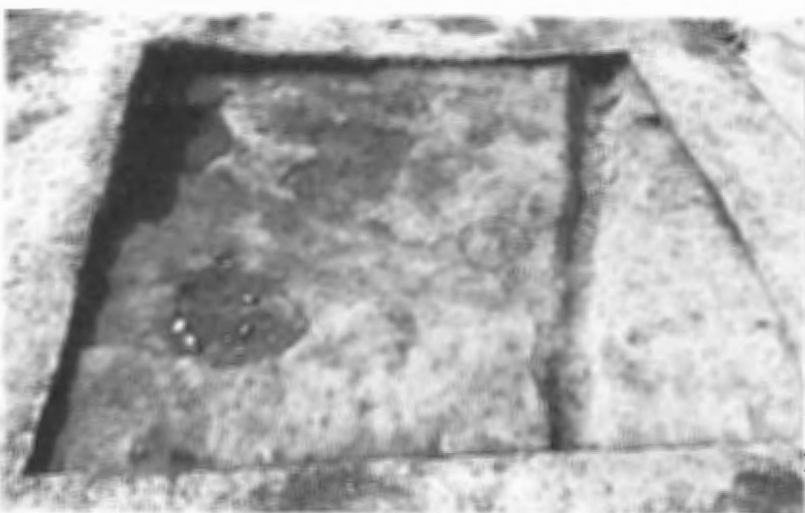
第4図版：G地点遺構（1）



37SA1 と37SD4  
E→W



同上  
(37SD4 掘り上げ)



37SA1 掘り上げ  
N→S

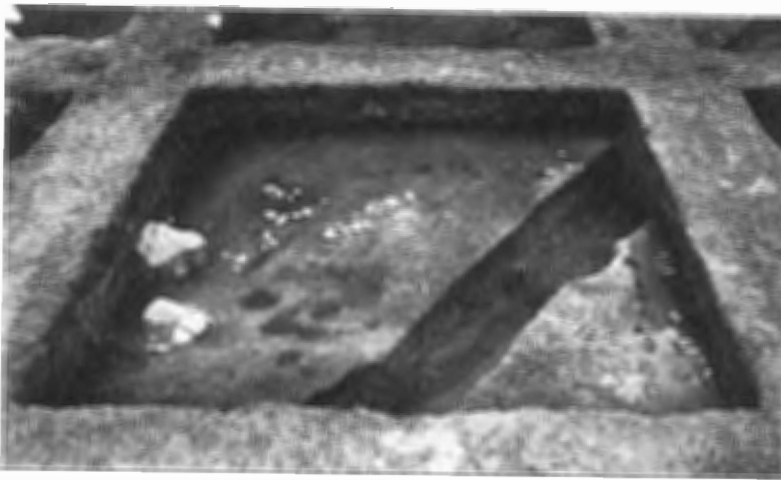
第5図版：G地点遺構(2)



37SD4(左)

37SD9(右)

検出状況 W→E



37SD1掘り上げ



同上  
(コーナー部分)  
W→E

第6図版：G地点遺構(3)



37SD1



37SD9の礫群  
S→N



37SA1と37SD4  
E→W

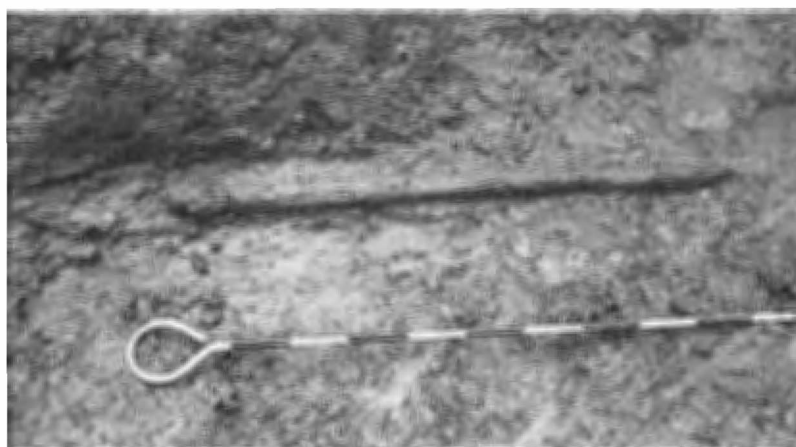
第7図版：G地点遺構（4）



H地点  
37 S A 3 · 柱穴検出



G地点  
37 S D 8 断面

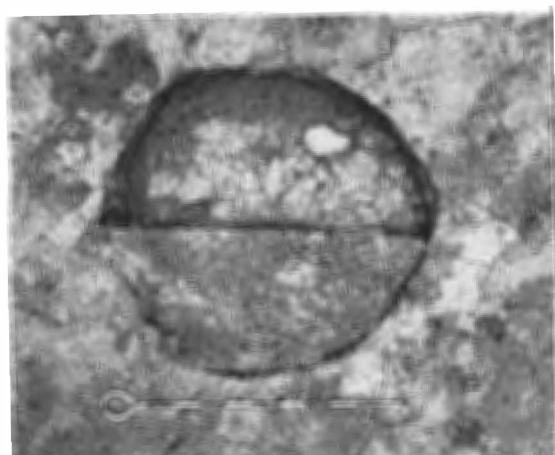


同上  
木製品

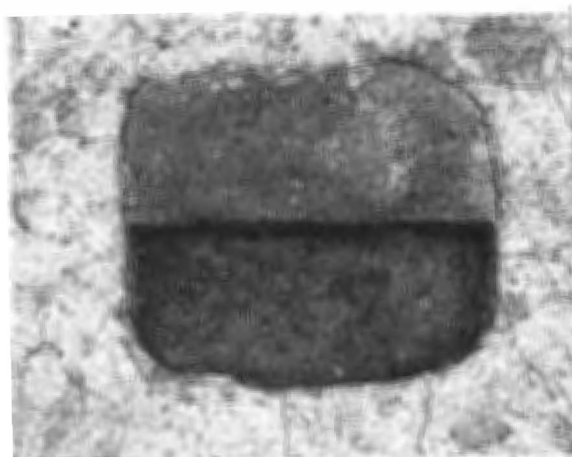
第8図版：G・H地点遺構



全景 (W→E)

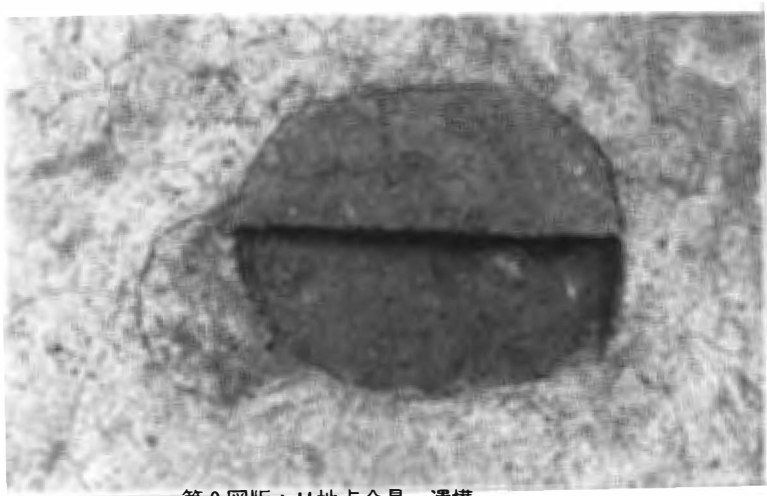


ピット4



ピット1

柱穴あるいは土坑



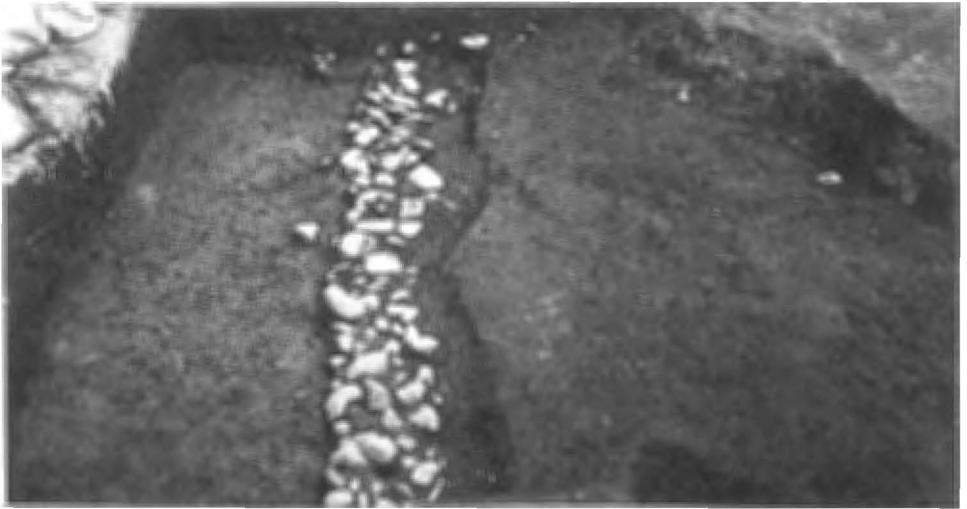
ピット2

第9図版：H地点全景、遺構





G地点柱穴と  
暗渠礫

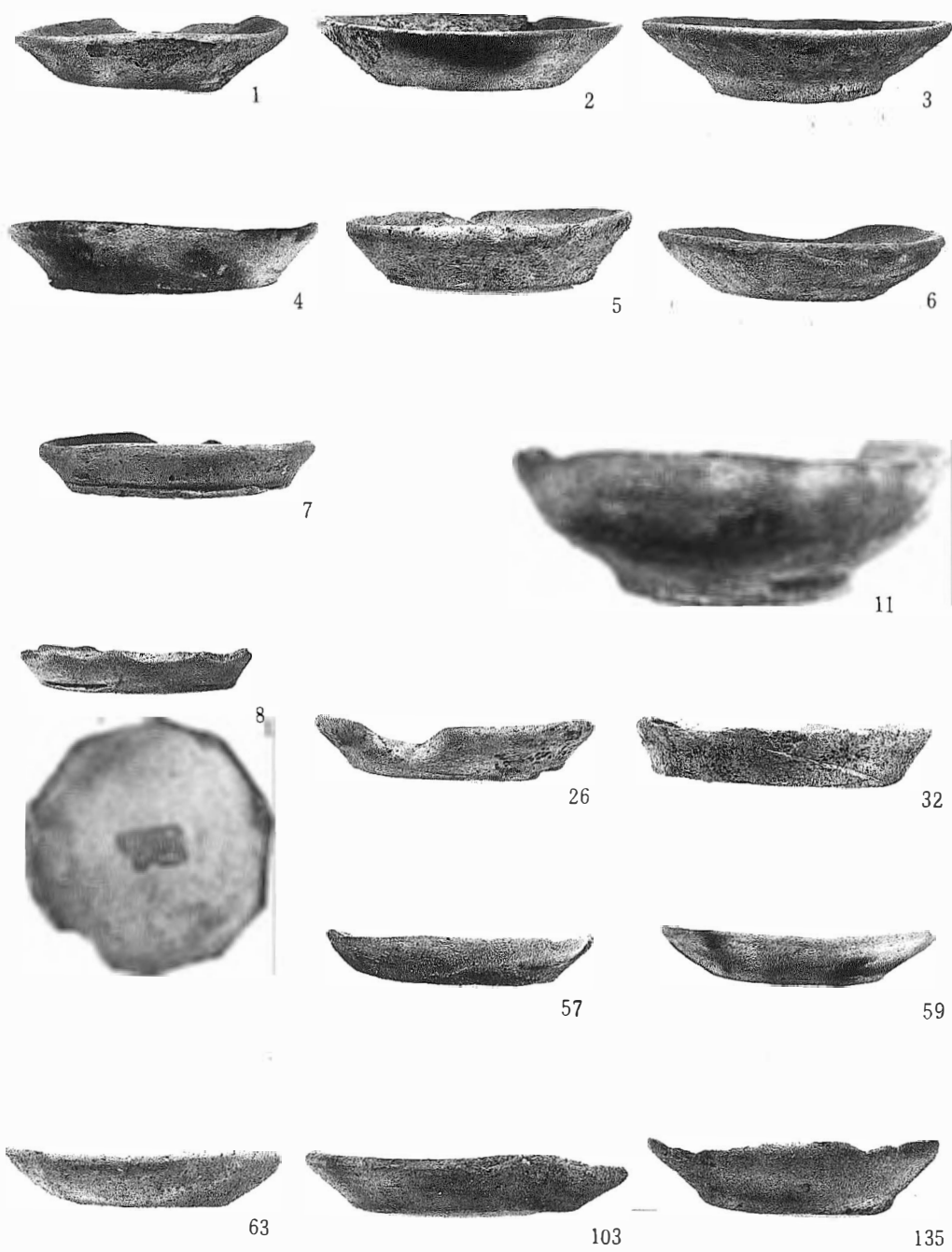


暗渠礫

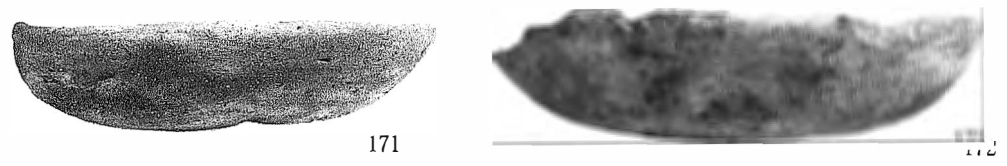
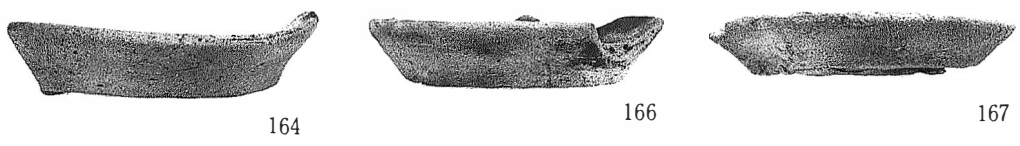


溝跡

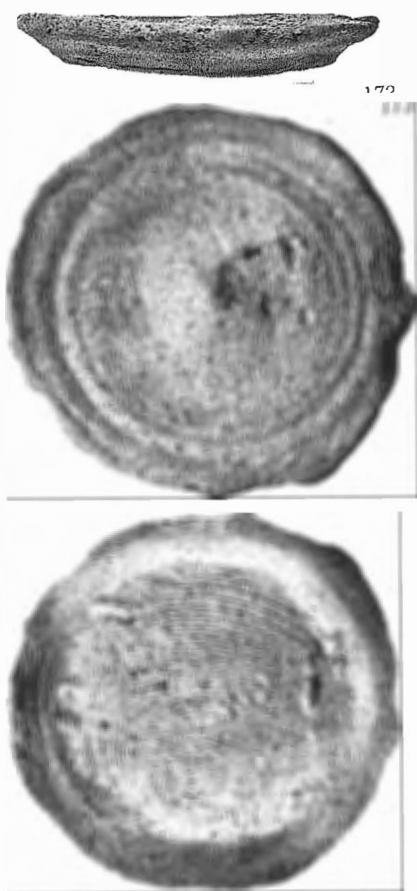
第10図版：各調査地点の近・現代の遺構



第11図版：かわらけ(1) (S=1/2)



第12図版：かわらけ(2) (S=1/2)

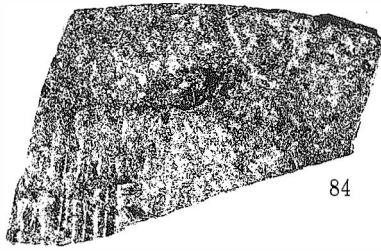


172

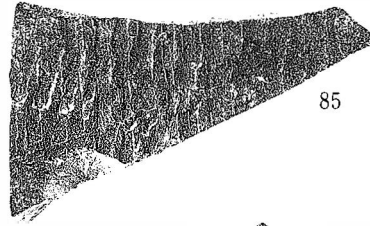


175

第13図版：かわらけ（3）（S=1/2）



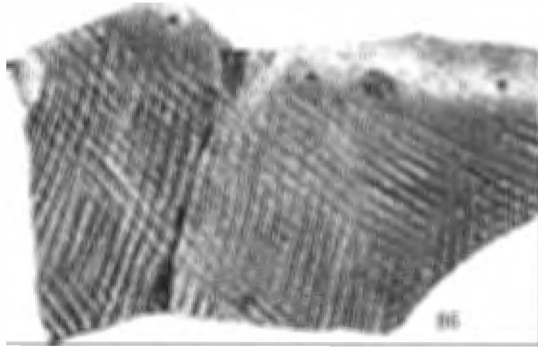
84



85



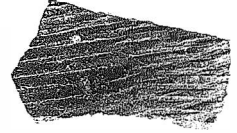
88



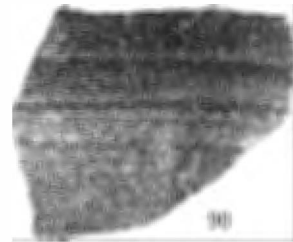
86



87



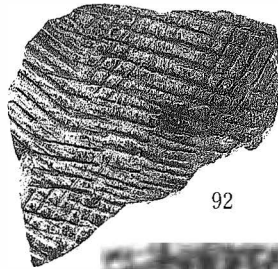
89



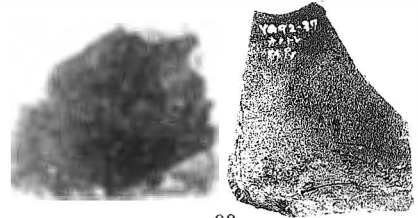
90



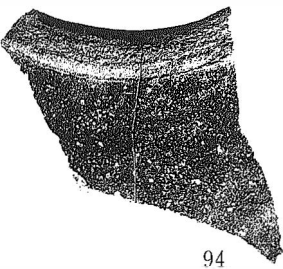
91



92



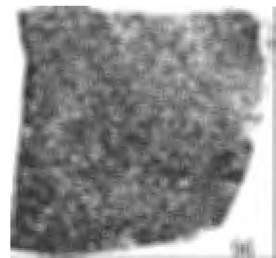
93



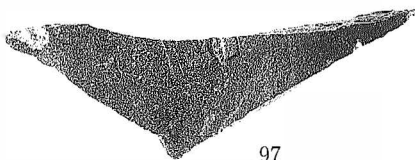
94



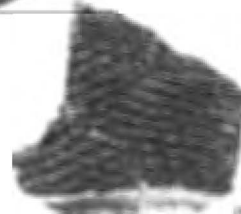
96



95



97

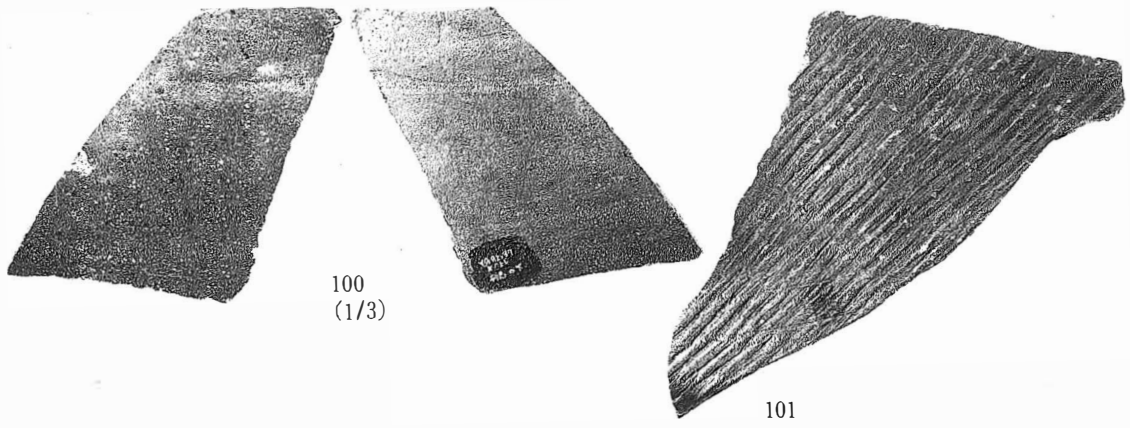


98



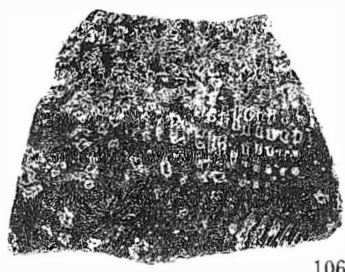
99

第14図版：国産陶器（1）（S=1/2）

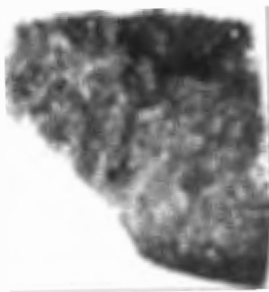


100  
(1/3)

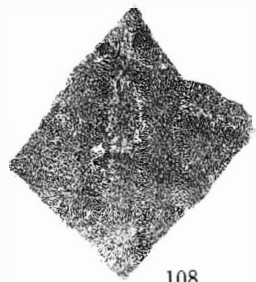
101



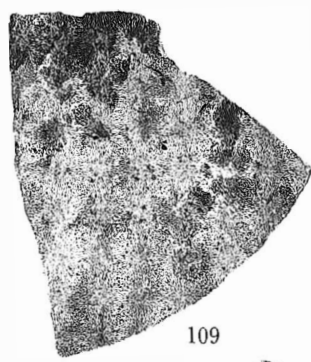
106



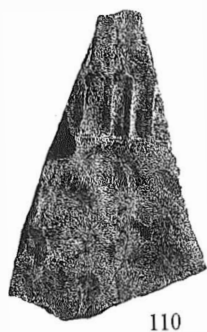
107



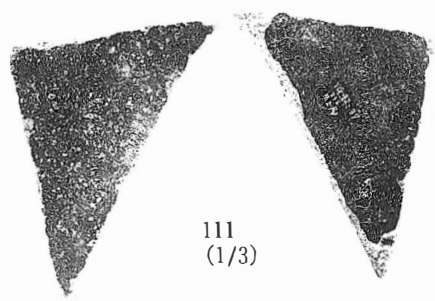
108



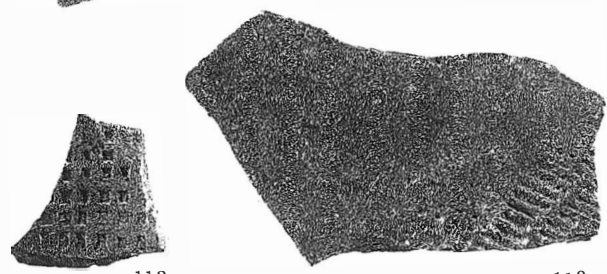
109



110

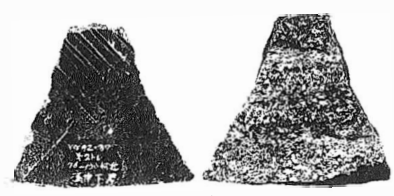


111  
(1/3)



112

113

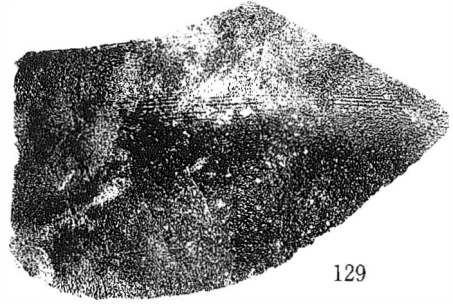


114

第15図版：国産陶器（2）（s=1/2）



128



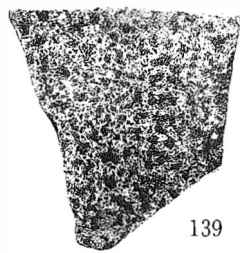
129



137



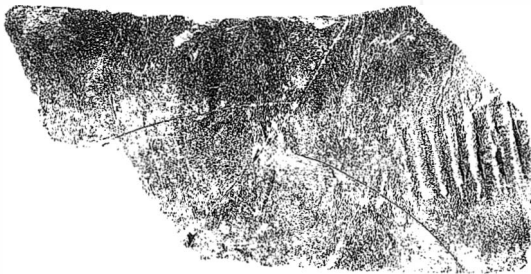
138



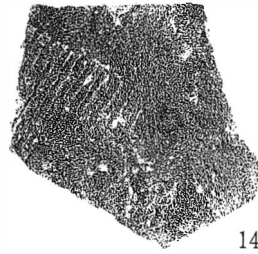
139



140



141



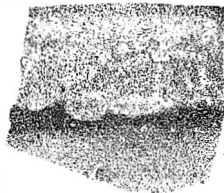
142



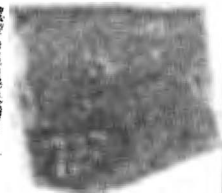
143



147

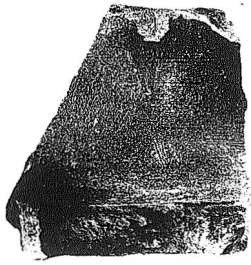


148

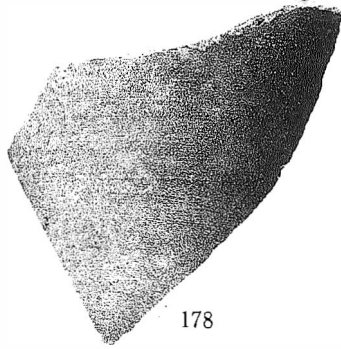


149

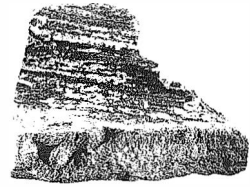
第16図版：国産陶器（3）（S=1/2）



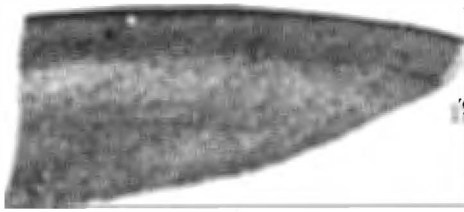
177



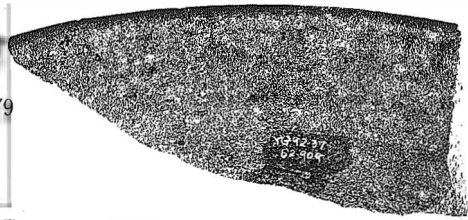
178



180



181



182



183



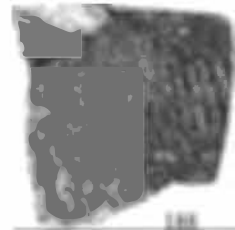
184



185



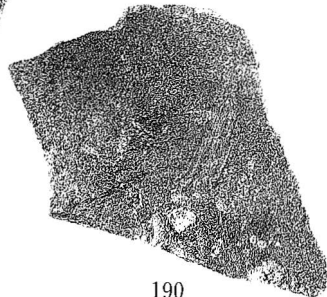
186



187



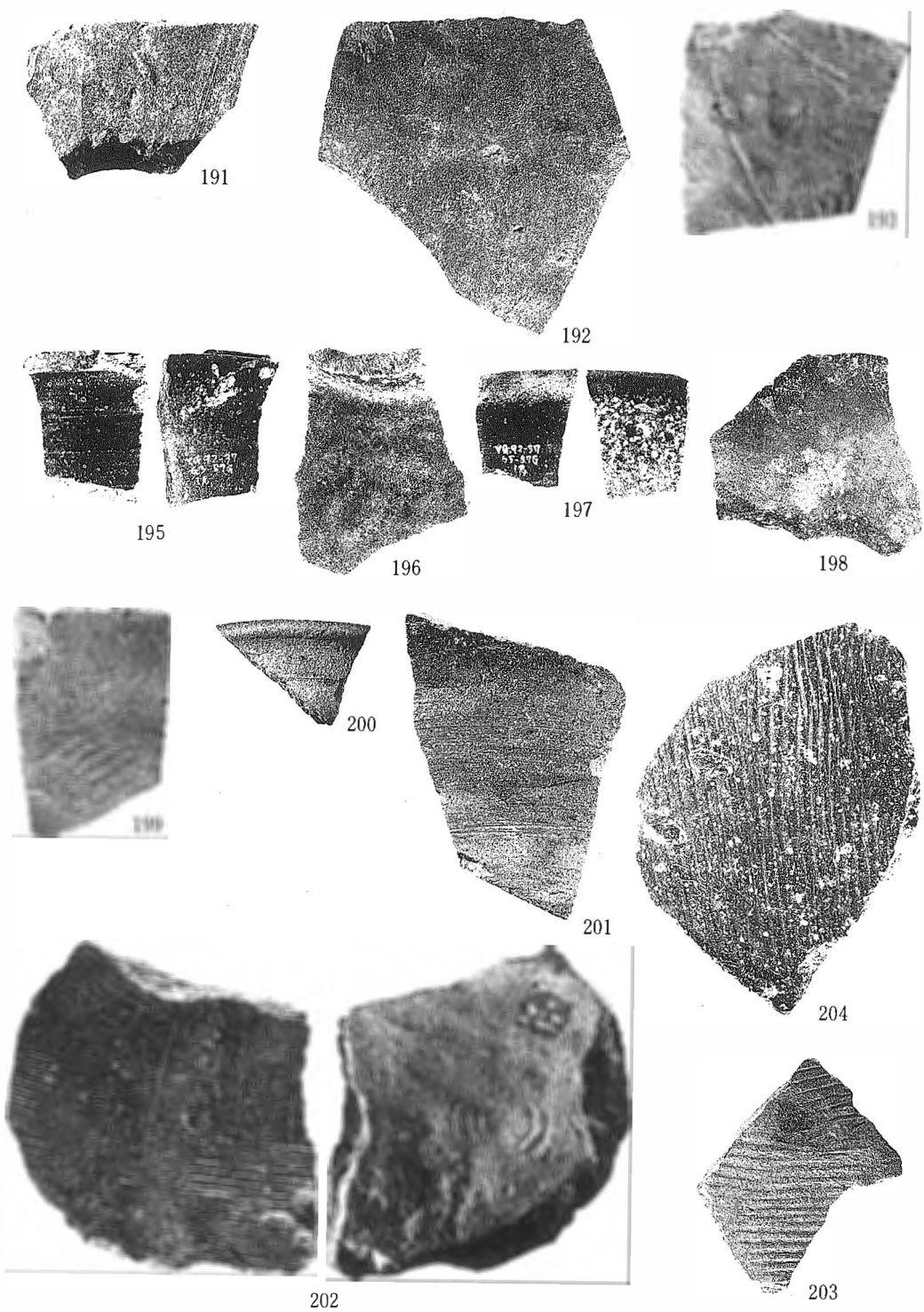
188



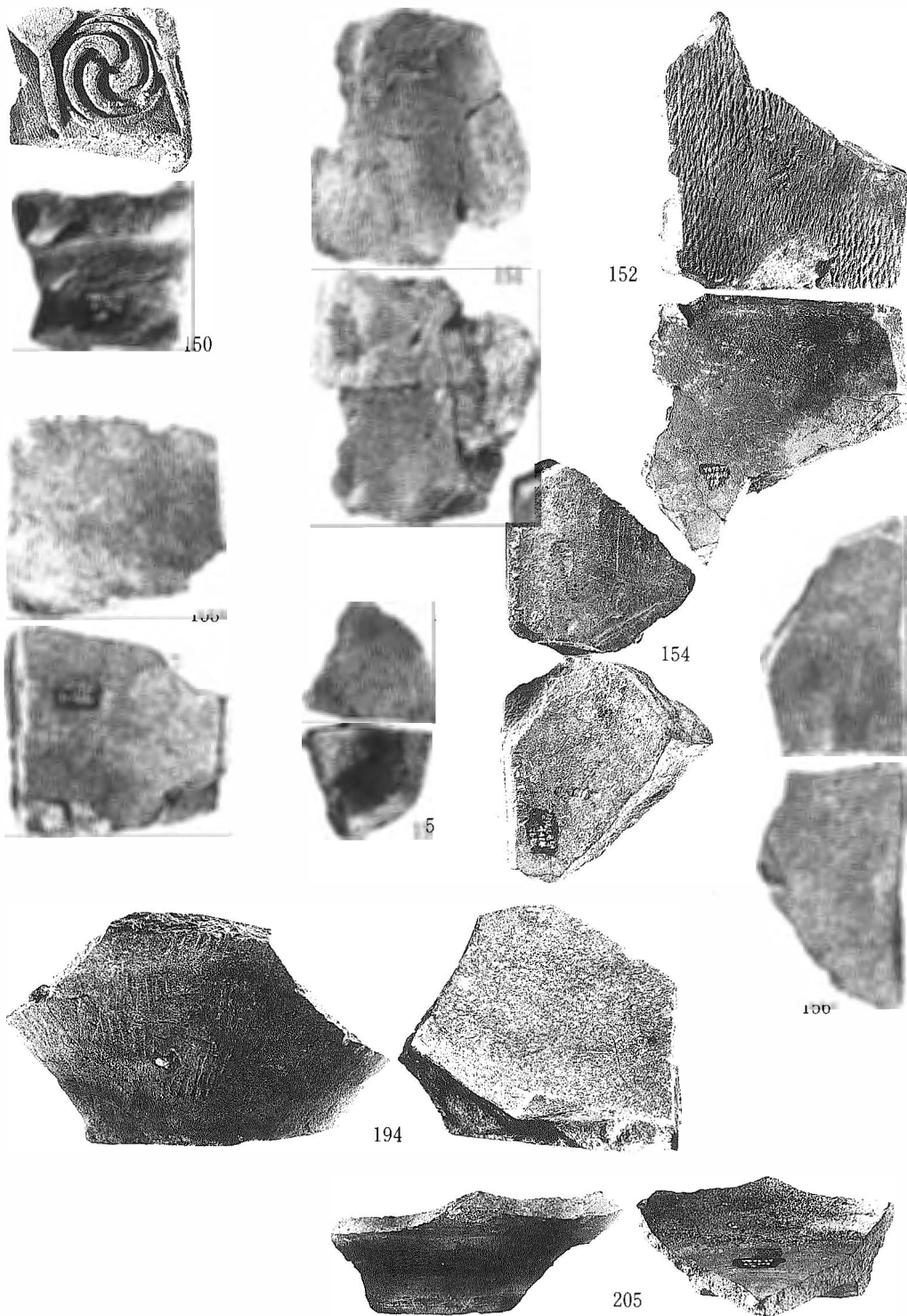
189

第17图版：国産陶器（4）（S = 1/2）

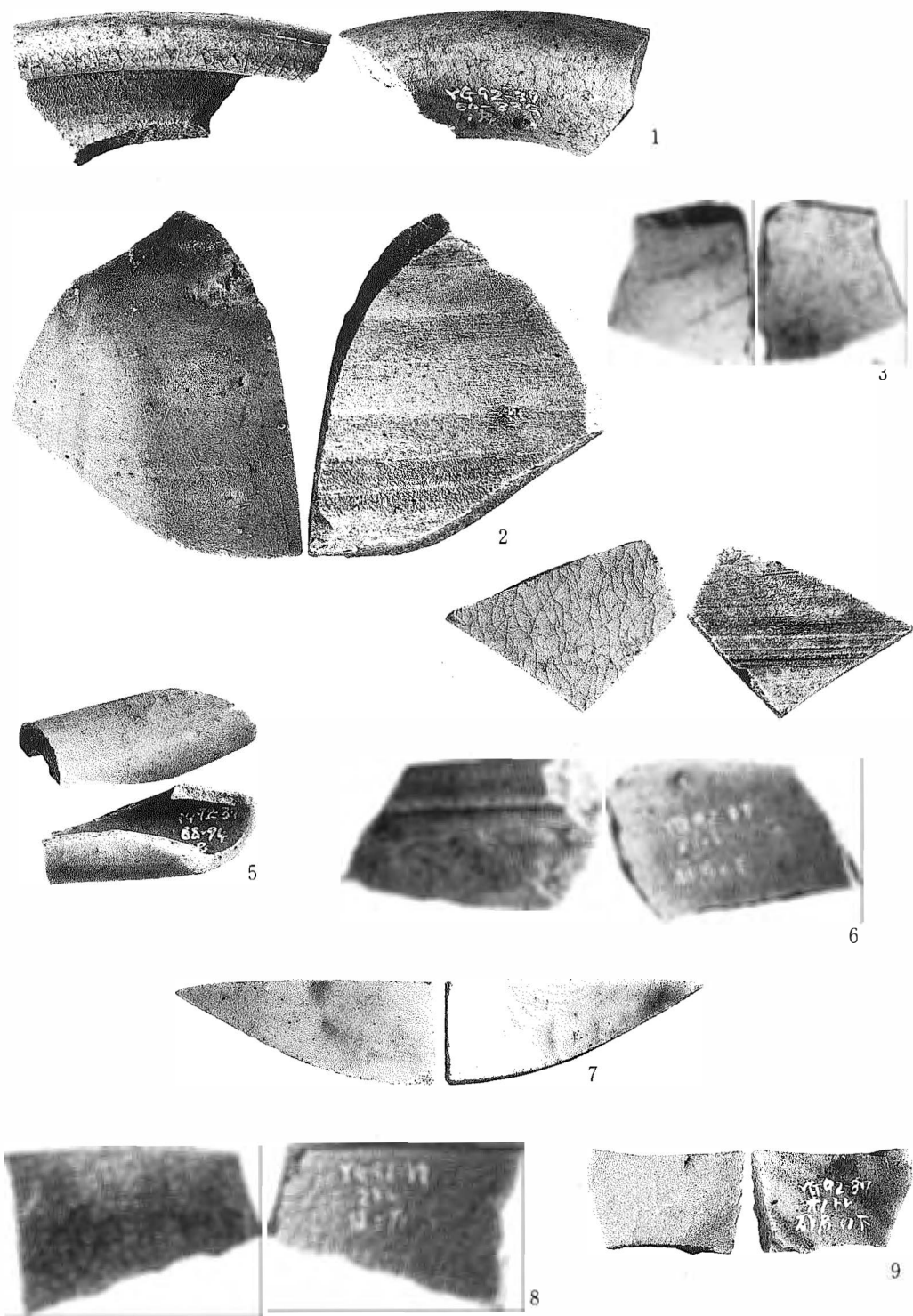




第18图版：国産陶器（5）（S=1/2）



第19図版：瓦および国産陶器 (S=1/3)



第20图版：中国産陶磁器 (S=1/1)

---

岩手県文化財調査報告 第94集

平泉遺跡群範囲確認調査

—第37次柳之御所跡発掘調査報告書—

平成5年3月25日発行

編集・発行 岩手県教育委員会  
岩手県盛岡市内丸10-1  
TEL (0196) 51-3111

印刷 川嶋印刷株式会社  
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21  
TEL (0191) 46-4161

---

